
天使と悪魔の共同戦線

鳴月 常夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使と悪魔の共同戦線

【Nコード】

N8550V

【作者名】

鳴月 常夜

【あらすじ】

見た目以外は普通の高校生、朝浦陽助あさひのひのやうすけは都内の高等学校、滝原高校に通う生徒である。ある日の夜中、夢の中で自らを神と名乗る超適当な老人に出会う。その老人が言うには、人間界に天使と悪魔を一体ずつ送るので、面倒を見てくれと言うものであった。

しかし、その天使と悪魔は陽助が想像していた以上に意外なもので……？

1話・夫からの刺客（前書き）

新作です！ 今回もまたSFに挑戦してみました。
更新率は上がると思いますので、みなさんよろしくお願いします。

1話：天からの刺客

始まりと終わりは唐突、って何かの本で読んだことがある気がする。はつきりと覚えているわけでもないのに、誰かが言った言葉だったのかもしれない。

その文字を見た　　いや、聞いたとき確か俺は共感していたはずだ。

始まり、いつも唐突で待つてはくれない。抗うことも出来ずただただ、迫りくるもの。

終わり、こちらもまた唐突で待つてはくれない。逃げることもかなわない。

対の存在のはずなのに、すごく似ている。意味を入れ替えても通じるような気がする。

と、言うよりなんで俺がこんな話をしているのかというと、純粹に暇だからだ。

今は昼休み。　　しかしながら俺の周りには人一人いない。

誰もが遠巻きに眺めているか、離れているかだ。………どちらも同じか。

その理由は十分自分で理解している。

目つき、雰囲気、愛想………etc.　　確かに俺は人付き合いがそんなに上手くはない。むしろ下手だ。

目つきも良くはない。三白眼がどうだとか目が鋭いだとかは知らん。そんなことで、ヤンキーだとか不良だとか言われたりする………いや、しない。

しないけど、周りに人がいないことは確かだった。

先に否定しておくが、不良ではない。煙草も酒も薬もしない。

ここばかりははつきりと言っておかなければならない。

そんな俺にも声をかけてくる物好きな奴がいる。物好き………とは違う？

「どうしたのっ、朝浦あさうらくん。そんな怖い顔して
ほら来た。昼休み終了十分前に自分の席に座り、かつ俺に話し掛け
てくるこの女。」

歌音うたね 美里みさと。 姓名も名も下の名前みたいな奴だ。
そして俺の前の席でもある。

「怖い顔はいつもだ」

いつも通りの切り返し。ここから昼休み残り時間は会話に使われる。
「あはははっ、そうだったね。そういえばさー」

と、まあこんな具合である。

滝原高校生、2年C組、朝浦あさうら陽助やうすけ。

そんな俺の生活は面白すぎることもなく、退屈することもなく平
凡な生活を送っていた。

面白いことは望んではいなかった。

だけど、退屈も望んではいなかった。

なんか今日は対比ばかりだな。

そう思ったころにはもう昼休み終了5分前だった。

「でさ、………聞いてる？ 今他のこと考えてたでしょ」

「ああ、………今日は対比ばかりだなって」

「？ どうしたの急に。何か悩み事？」

ちよこん、と高めに結んでツインテールにした髪を揺らしながら首
をかしげる。

きゆるん、と目が心配そうな光を見せる。

歌音は女子でも可愛い方の部類に入ると俺は思う。だからと言って
これはどうなんだろうか。

素でやっているのだとしたら恐ろしい。

「や、………なんでもねえよ」

「そう？ 無理には聞かないけど、困ったときはお互い様だからね
？」

上手いな、歌音は。

自分から突っ込むことをしない。相手が頼ってきたら、本気でそれに応える。

なかなか出来た人間だよ。何で俺なんかに構うのかねえ……………。

あ、俺が一人だからか。

「さ、次は英語だよ」

何が楽しいのか、鼻歌交じりに教科書を準備する歌音。

そこは紛れもなく平和だった。

深夜、がたがたと風によって鳴り響く窓の震える音で目が覚めた。朝はあんなにも天気良かったのにこれはなんだろう。

眠れなくなってしまったので仕方なくベットから起き上がる。リビングの電気をつけ、テレビをつける。

謎の低気圧が日本列島に接近中で……………雨風が強いです！ ああー

情けない声を出しながら風にされるがままになるレポーター。大変だな。

ソファーに腰掛け、ぽちぽち…………とチャンネルを変えてテレビを流し見する。

リビングに反響するのはテレビの音のみ。それはそうだろう、俺は一人暮らしなのだから。

両親に無理を言ってマンションの一室を買ってもらってここに住んでいる。誰もが憧れるであろう夢の一人暮らしというわけだった。もちろん親には感謝している。

俺は不良ではないのだから、高校をしっかりと卒業した後就職し

て親孝行するつもりだ。

と、そんな話はいいとして目が覚めてしまった。チラリと時計を見やると午前3時。

なんて時間に起きてしまったんだ。

ガガガガガ、と風がさらに強まる。窓が振るえ、今にも割れそうな勢いである。

たぶん、というかまず眠れないと思う。俺はうるさいのは嫌いだった。

暇つぶしにすることもないのでソファで横になる。こつすれば多少は眠気が襲ってくるであろうという考えだ。

コォーン、コォーン、と遠くで音がする。看板でも吹き飛ばされたのだろうか？

めきめき、と嫌な音。マンションが軋んでいるのかもしれない。どれほど風が強いんだ。

ゴゴゴゴ、と地鳴りの音。地震……………か？

その揺れは激しさを増し、縦揺れへと変化する。

「ま、マジかよ……………ありえんだろ！？」

身体を起こして辺りを見渡すと、そこはもう俺の知っているマンションではなかった。

空気が澄んでいて、明るい。先ほどの天候とは打って変わって晴天だった。

「へ……………？」

混乱して座り込んで状況を整理しようと試みるが、それも上手くいかない。

夢か、これは夢でいいのか？ それにしては五感がやけに反応している……………というか夢にしてはリアルだ。

すっ、とそこで俺の頭上から影が降ってきた。

「ほっほっほ……………やあ」

「だ、誰ですか」

こちらを見下げていたのは白髭のおっさんだった。どこか仙人を思わせる風貌をしていた。

杖だつてついでるし、髭が地面すれすれまで伸びてるし。

「ワシは大天使、いや神様である！」

「こんななれなれしい神がいるかよ……」

「嘘じゃない！ 本当じゃもーん」

そう言つて神様（仮）は頬を膨らませたりしている。もちろん可愛くないし。

加えてヤバい、むかつく。夢の中のはずなのにすっげえ腹が立つ。初対面の人間にここまでイラツとしたのは初めてかもしれない。

「まあ、そんなことはどうでもいいのじゃ。明日からお前のところに天使と悪魔を一匹ずつ送るからのー世話してやってくれ」

「まったくもつて意味が分からないんですけど。唐突にもほどがあるでしょう！」

「下界に修業のために仮住まいが必要でのー。普通……いや、とりあえず頼んだからの」

「適當すぎんだろー！」

「はいさようならー」

神様（仮）がそう言つと周りの景色が液晶のごとく大破していく。崩れ落ちた風景の隙間からは真っ黒の空間が現れ、俺はそれに？まられていった。

「夢であつて欲しかった……」

朝目が覚めると、黒い羽を生やした小さな女の子と白い羽を生やした少女がじゃれあつていた。

というか、一方的に白い羽の少女が黒い羽の女の子に向かって何事かを話していた。

「はっ!?」

両方は俺に気づくと立ち上がり、深々とお辞儀をした。

「私たちは天界からやってきました。単刀直入に言いますと、私達
はこれからあなたのお世話になります。じ……………神様からお告げを
頂いていると思いますか?」

白い羽を生やした少女 おそらく天使であろう子がそう言っ
た。

ああ、確かに聞いていたとも。夢の中で、な……………。
使いが2人ほど修行で人間界に行くからよろしく頼む、と。とりあ
えず送つとくからがんばってねー、みたいなノリで。

「……………聞いている」

「ひやははははっ、そうか。じゃあ、わ……………アタシ達はここに住
むことになったから、よろ……………よろしくう!」

黒い羽を生やした女の子 おそらく悪魔であろう子がそう言
った。

それも聞いた。そして、この非日常が俺は何で受け入れられるか、
なんだけども。こういうこと昔にもあった気がして……………今は記憶に
ないんだけど確かにあったんだよ、昔。

だから驚かないって言うか、驚いても何もいいことがないって言う
か……………。

起きてしまっていることはどうにもならないような気がして、受け
入れるしかないと思うから。

「あの……………どうかされましたか、ゴ……………陽助様?」

天使が顔を覗き込んでくる。あまりにも整った顔に思わず見蕩れて
しまう。

「って! なんでもない。……………2人、名前は?」

「私の名前はミュと呼んでください。下等……………いえ、陽助様」

どうぞよろしくお願ひします、と礼儀正しく頭を下げる天使、ミュ。

「アタシの名前はスイです、っだ! よろしくう!」

一瞬間を下げようとするが、一度びくりと体が跳ね上がると、こっ

ちにガンを飛ばしてきた。怖くない。

むしろ、小さな女の子が『怒ってるぞっ』って言ったときの顔にしか見えない。

ミユより頭一個分低いスイは、身長と顔のせいもあってかかなり幼く見える。

と、話がずれたな。

「で、俺は具体的に何をすればいいんだ？ 修行って言っても俺が教えられることなんかないぞ」

「いえ、大丈夫です。学校に通い、人間と触れ合うことが今回の目的だそうです。なので、下等生物……いや陽助様にはそのサポートをしていただきたいと思っています」

……何かおかしな点は見当たらないだろうか？

「じゃあ、スイもおんなじってことでいいのか？」

「ひうつ！ ああ？ ……ああ！ オツケーだ！」

……何かおかしな点は見当たらないだろうか？ 気のせいでは……ないだろ！

「ちょ、ちょっと待て。俺は何か大事なことを見落としている、というか見て見ぬふりをしているような気がするんだが……」

「いきなり饒舌になりましたね」

こいつだ。

「おい………ミユ。お前相当性格悪いだろ？」

「何を根拠に言っておられるのですか。 あなたのような下等生物………いや間違えました、陽助様にそんな洞察力は備わっていないかと私は考えます」

「肯定つてことでもいいか！？ それに間違える要素がどこにあるんだよ！ 最後の方も誤魔化してるつもりかもしれないけど結構貶してるからな！？」

「いきなり饒舌になりましたね（笑）」

「（笑）じゃねーよ！」

「あわわわ、喧嘩はよくないよおー。ミユちゃんも陽助さんも……」

……はっ！」

俺とスイだけが、この部屋の中で凍りついた。

「あ、えと、喧嘩なんかしてんじゃねえよカスどもがあ！」

「すべてにおいて遅いわ！ てめえもキャラ作ってやがったな！」

「んなわけないだろうがあ！」

「だから遅いつつうの！」

「急に饒舌に

」

「それはいいっての！」

なんやかんやで騒々しい朝だった。折角の休みの日の一日の始まりがコレだった。

「で、平日はどうするんだよお前ら」

朝食を3人(?)で取り終えた後、テーブルを囲んでこれからについて話し合う事になっていた。

天使や悪魔も食物を取るんだなあ、と無駄に知ってから5分後の話である。

「もちろん学校に行きます。すでに許可は出ています。ジ……………神様は何でも出来ますので」

さらりと言ってみせるミユからは、冗談を言っている様子はない。それにしても、取り繕ってる感がビシバシ伝わってくる。

なんか早くもうんざりしてきた……………。

「わっ……………アタシも行くことになるからなっ！ 覚えておけよ！」
こっちはこっちで、無理にがんばってる感がすごく出ている。

それが可愛らしく見えているのも一つの問題だとは俺は思う。どう考えても悪魔って言う感じじゃない。

「どうせそんなことだろうとは思っていたけど……………羽はどーすんだ

「？」

「ステルス機能が使えますのでご安心を。ゾウリムシ……いえ、陽助様が気にかけることはおそろくないかと」

「わざとだろ。切れて良いのか？」

「そんな怖い目で睨まないでください。震えてしまって立てません嘘だ。超余裕、見たいな顔してんじゃねえか。」

「ここここ……怖いよお」

涙目でカーテンに包まっている奴一名。言わずとも解るだろう。

「……まあい。それよりお前らここに」

ピンポン

玄関のチャイムが鳴った。正確に言えば、エントランスからの通信だが。

「んあ？ 誰だろ」

モニターで確認すると、ニコニコと笑う青年がダンボールを抱えていた。

「きたようですね」

「そだねー……はっ！ そだねっ！」

二人して同じような反応を見せる。どうやら宅急便のようだ。

ダンボールを受け取り、部屋へと戻ってくる。

これ、なんだ？

「早速開けましょう」

出てきたのは、制服・カバン・体育服……etc.

これは一つの可能性を表していた。生活用品が多い……。

「お、おい。まさかお前ら……ここに住むわけじゃ、ないよな？」

そんなときだけ二人はシンクロしたように声を重ねて言う。

「あたりまえでしょう？」

1話・天からの刺客（後書き）

いかがでしたでしょうか。

見た目ヤンキーな陽助に加えて性格破綻天使ミュ、超ビビリ悪魔スイが主な登場キャラクターとなっています。

この三人が繰り出す日常とその他の出来事を楽しみにしててくださいー！

これからもどうぞよろしくお願いします！

2話：名前の付け方

昔、夢で見たことがあった。お前は統率者になるのだと。

この間の夢のように適当なものではなかった。真剣な声で、そして真剣な眼差しで俺を見つめて。

もう一度、お前は統率者になるのだ

言っている意味が理解できなかった。それもそうだ、小学5年生だったころの夢だ。

なのに今でも、はっきりと鮮明に残っている。

これはこれは不思議なことだ。しかし、統率と言われても何を統率するのか俺には分からなかった。

そして俺が非日常を受け入れられるのが最も理解できなかった。

それより前の話なのだが、今と同じことがあった気がする。気がするのだが、覚えていないので気がするという程度でおさまっているのだ。

性格のねじ曲がった天使とビビリの悪魔。こいつらと理解不能な日々をこれからすごさなければならぬというのも、自然と受け入れられていた。

「アオミドロさん、起きてください。そして使用人のように私たちに朝ご飯を提供してください。私たちが餓死してしまいますよ？」朝から抑揚のない声で平然と毒を吐き散らす天使に起こされた。

いや、すごく可愛いのだが性格が破綻しているので起こされても全然うれしくない。

「なんだアオミドロって……。そして訂正をしないお前が怖い」

「朝から色々元気ですね。突っ込みとかその他も」

「さっさと部屋から出てけや！つか、まだ6時じゃねーかよ！」

「私は規則正しい生活を送らないと気が済まないんです。というわけ
で協力してください」

「とりあえずあと1時間は寝かせてもらうぞ。それまでお前も我慢
してろ」

そう言っつて布団をかぶりなおす。

「……………」

とくに返事もなくなったのであいつも納得したのだろう。俺はその
まま眠りに。

「うごおあー！」

腹部に思いつきり肘が入った。

「決まりました、じゃすとみーと」

キラリ、と目を輝かせて親指をぐっと立てるミュ。

「嫌でも目が覚めましたね、さあ、朝ごはんを作ってください」

「て、……………てめっ」

「……………おなかが痛いのでしょうか？」

「何普通に聞いてんだよ!? お前の仕業だろうが」

「記憶にございませんな、はっはっは」

「てめえ何キャラだよ！」

俺とのやり取りに満足したのか、俺の部屋を出ていくミュ。ついでに

「朝ごはん」

と呟いて出て行った。どんだけ腹減ってたんだよ……………。

リビングまで行くと、すでに制服に着替えたミュが椅子に背筋をピ
ンと伸ばして座っていた。

そういえばスイの姿が見当たらない。まだ寝ているのだろうか。
そんな俺の気配を察してか、またも抑揚のない声でミュは言う。

「あの子はまだ寝ていますよ。たぶん遅刻ギリギリまで起きないと
私は思います」

珍しく一切毒のない返しだった。

「わかつたらさっさと飯作れ。……………作ってくだ、作れ」
毒は盛つてあった。

「なんでいったん敬語に直そうとして途中で止めて命令文に落ち着くんだよっ!？」

「朝から陽助様は饒舌ですね。しかし目つきが怖いです」
知ってるわ。ほっとけ。

心の中でぶつぶつ言いながらも朝食の準備をする。いつもより一時間早い朝食作りである。

いつもの軽くすませるメニュー。もちろんトースト一枚とミルクティーという組み合わせである。トーストにはマーガリンしか塗らない派である。マーマレードとかジャムなどはどうも甘すぎて自分には合わないのだ。

チン、ガシヨン。とトーストが焼きあがった。適当にマーガリンを塗りたくって皿に載せてテーブルに並べる。

「む、なんですかこのパン一枚は」

「文句言つな、俺がいつも食べている朝食だ」

「流石は下民。食事バランスが悪すぎて最早支えるどころの騒ぎではありませんね。万年横倒し状態ですね」

「マジでほっとけや! というか居候のくせに文句を言つな!」

「もぐもぐ……………」

「あ、いや。もう聞いてすらないのか。チッ、スイ起してくるわ」
「怖いです」

微塵も思っていない癖に平坦な声で囁くように言ってきた。
つ、突っ込んでられん……………シカトだシカト。

ミュとスイ共同の部屋の前で立ち止まりノックする。一応念のためだ。

「スイ、寝てんのか？」

中からは声が聞こえない。寝ているのだろう、ドアノブに手をかけて中に入る。

床に敷かれた布団は一枚はきれいに片づけられていて（ミュのものだろう）もう一枚には黒い羽根をはやした少女が寝ていた。

「おい、ちよつと早い朝食作ったから食べ。それに今日から学校だろうが」

「ううん……ふん。んああん、むにゃ」

「起きろっつーの！」

思いつきり布団を引つpegす。そこに見たものは少女の下着姿だった。

は？ はあ？ HA？

「てめえはなんで下着なんだよ！？」

俺の大声に目が覚めたのか、パチとスイの目が開く。

自分で自分の体を見まわし、かああああと顔が赤くなる。そして俺の顔を見る。

「ひうつ！ 悪魔がいますう！」

俺から布団を奪い取って体を隠し、ざざざざざと部屋の隅まで後退する。

「ななななな、なんでここにいるですか！？ 夜這い？ いや朝だから朝這い！？ そんな言葉ありましたっけーっ！ 私頭悪いからわからないんですっ、とりあえずごめんなさい貞操だけはっ！」

「マジで突っ込みどころが多すぎで腹立つんだけどもとりあえず誤解は解いておこう！ 俺は責様を起こしに来ただけだあ！」

「ひう、ごめんなさいー、怖いからすいませんー」

ギィ、とドアの隙間からこちらを見る目。

「ロリコン……」

ミュだった。

「てめえはてめえでなに不吉なこと言って去ろうとしてんだおい！ 待てや！」

「いーやー、て・い・そ・うがー」

「だから無表情そういうこと言つのはやめろやー！」

どつたんばつたんと朝から超騒がしかった。

「疲れた」

なんとか学校までたどり着いた俺は机に突っ伏していた。

朝から体力を使うことなんてはつきりいつてまず俺の中ではありえないので、体がおかしくなりそうだ。今日の授業の大半は睡眠になりそうだ。

「どーしたの、朝浦君？朝からぐったりしてるね」

前の席から声がかかる。歌音だろう、俺は顔だけ向けて適当に返事をした。

「うわ、いつもより顔怖いよ？」

「ほっとけ……………」

「そういえば今日転校生が来るんだってね！ それも2人だよ」
何がそんなにうれしいのか、歌音はいつもより笑顔である。

「とりあえず俺のクラスには来ないでほしい」

「あーっ、なんでそういうこと言っかなあ。朝浦君、これは友達を作るチャンスなんだよ？」

「いや、……………なんでもない」

いろいろ否定したい部分があったが、もうなんだか面倒くさかった。それに転校生の正体わかってるからな。マジ面倒な奴らだよ。

「このクラスに転校してくるといいね」

「あー、ああ」

俺は適当に相槌を打って誤魔化した。もう面倒くせえどうにでもなつちまえ、と。

でも、このクラスには来るなよ、と。

俺の願いは届いたのだろうか？

それは次に目が覚めてからのお楽しみだ。

さて、おやすみなさい……………。

「朝浦君、朝浦君っ！」

歌音のはしゃぐ声で俺起こされた、時計を確認。30分程度しかたつていない。

「どうした、騒がしいぞ」

「優美さん、可愛いよ？このクラスに転校してきたんだよー！」

「優美？……………ああ」

ミュ ユミ ゆみ 優美か。了解。

再び寝ようとする俺を止める歌音。

「んだよ」

「なんだよじゃないよう。あんなに可愛い子が転校してきたのに興味がないって男の子として駄目だよ。こういうのはガンガンいかないと」

「わりい、どうでもいいとかいうレベルじゃないんだ。寝かせてくれ」

「一目見るだけでいいからっっ！」

首を曲げられ俺の視線は生徒が集まる中心へ。そこにいたのは普段は黒い羽根を生やしているであろう少女がいた。……………あ？

「っっておかしいだろうが！」

「うわっ、びつくりした朝浦君。いきなりどうしちゃったの？」

俺は構わずスイのもとへ。

「お前はなんでそんなにめんどくせえ名前にしてんだよ」

「なななな、なんでっ……………。ミュが」

「じゃあミュはなんて名乗ってんだよ。翠ちゃんか、ああ？」

「いえ、普通に美由ですけど……………？」

「なんでだよっ！いきなり意味不明なことするんじゃないよ！」

「ひう」

周りからは非難の声。

朝浦が転校生を威嚇しているぞー。とか早速びびらせてるわー。とかかつあげ発生かー。とか。

「こらこら、朝浦君っ。優美ちゃん怖がらせ怖がらせたらだめだよ」

「べ、別にアタシは怖がってねーけどな」

体格に不釣り合いな言動。というか学校でもキャラつくんのか、長くは持たないだろうけどな。

「チツ、俺寝るから。邪魔すんなよ」

そう歌音に告げてから、俺は席に戻った。

その時また別の場所で出来る人だかりの中からミュがこちらを眺めて笑っていた（ようにみえた）のはシカトするべきものだと思が警告していた。

俺はもう学校ではあいつらに関わらんと決めた。

今みたいに超面倒なことになるからだ。今の騒ぎで俺はさらに不良のレッテルが張られたことだろう。転校生を脅す朝浦陽助、か……。マジ萎える。

俺はすぐに深い闇へと落ちて行った。

3話・回り回って

こうして天崎美由ことミユと黒崎優美ことスイが何故かふたりそろってこのクラスに転校してきた。

転校生が同じクラスについてありえないだろ……。これもあの神様とかいう奴の仕業か。

なんでもアリだなもう、しかし俺は学校ではそんなに目立つタイプではない……。のであんまりあいつらとは関わりたくないとは思っていた。

学校では、せめて学校では静かに暮したかった。

「下等……………いえ、朝浦さん……………いえゴミムシ。私たちは今日転校してきたので学校内の案内をしてくださいませんか？」
さっそく関わってきやがったあああつ！

なんなんだ、何故俺なんだ。他にもいるだろ、歌音とか！

「そ、そうだぜ！ 案内しやがれこのやろー！」

優美……………いやスイがいかにもって感じて迫ってくる。いやだから怖くないから、表情歪んでるし。

「ほらほら朝浦君、折角美少女転校生が迫ってきてるんだよ？ 仲良くなるチャンスだよ！」

歌音もなんだか面白そうにはやし立ててくる。駄目だこれは、避けられない。

だからとっておとなしく従う俺ではない、学校では静かに暮したいって言うてるだろう！

「じゃあ歌音、俺の代わりに案内してやってくれ。俺が行くとまた変なうわさが立つだろ……………転校初日から浮いてたんじゃあこいつら先が思いやられるだろ」

俺は頭を机に伏せたままそう言った。

そう、こいつらのことを考えて言っているのだ。そのところ歌音なら理解してくれるだろうし、こいつら二人も理解できるだろう。

「何を言っているのですか？ あなたの噂なんてとづくに取り返しのつかないことになっていきますよ？ このクラスでさえこんなに風潮されているのですから……悲しいですね」

「だよなあ！ アタシもさっき色んな子から聞かされたし」
グサツ

何かが深く突き刺さった。

俺……いや、分かってたけどさ、何この気持ち。しかも俺が心配してやっているのによ。
何こいつら……。

「え、え……え〜？ 朝浦君が言ってることそういう意味じゃないと、思うんだけどなー？」

歌音が困り顔をしながらもフォローしてくれる。それがまたつらかった。

俺はこのとき確信していた。学校も安静の場ではなくなったと。

最悪だ……神よ、俺を見捨てたのか……？ いや神はあのおっさんだったか。もう終わったな俺、神の加護とか受けるとか受けないとかいう問題じゃねえな。直々に見捨てられているよ。

「どうなんですか、ゴミムシ。案内してくれるんですか、どうなんですか？」

「最早訂正もなしかよ……いいよ、いってやる。その代わり何言われるかしらねえぞ」

「や、やった……じゃなかった。やっと分かりやがったかあ！」

早くも仮面が外れそうになっているスイはシカトしておいて俺は席を立つ。それだけで少し教室の雰囲気ざわつとした気がする。心が折れそうだ。

「私も一緒に行つていいかな、朝浦君」

きゅるんと可愛く輝く瞳を最大限に利用して歌音はそう頼みこんでくる。これが素でやっているから恐ろしい。っていうか、今の流れだつてきて当然じゃないのか？ いちいち礼儀正しい奴だな。

「構わないよな。美由、優美」

「きゃー、いきなりしたのなまえでよばれたわー」

「なんつう棒読み！　しっかしイライラするなお前は！」

「お、おまえっ。アタシのこと名前で呼ぶなよな！」

「え、えーっと……とりあえず行こうね？」

唯一まともだったのがやはり歌音美里だった。

「んで、ここが食堂。俺は大抵ここで食べるかさつき行った購買でパンを買って昼は済ませてる」

「かわいそうに、いつも一人で……お友達いないんですよね。流石ダンゴムシレベルですね……。あ、いえダンゴムシ様に失礼ですねこの階級ピラミッドの最下層が！」

「え、え、……美由さん？」

「空耳でしょうか？」

「まぎれもなくお前の言った言葉だろうが！」

歌音が動揺し、ミュがスルーし、俺が突っ込む。

食堂に溜っていた下級生が驚き早足で逃げ出していく。ああっ、そんなつもりじゃ！

「流石は魔王の生まれ変わりとしか言い表せない眼をもった朝浦さんですね。ああしまった。朝浦さんと呼んでしまった……屈辱ですね」

止まることなく吐きだされる毒に対して俺はなす術がなかった。

俺は解毒薬なんて持ってきていない。このまま毒に犯されて死ぬのか俺。

もう歩く力も残ってないかもしれない。

歌音と言えばこちらの会話に気付かずスイと話をしている。スイは取り繕うのに必死で冷や汗をかいている。どうしてもアレ、取り繕

う必要があるのか。

「あれ、屑さん？ ゴミクズさーん。次の場所へは行かないのですか？」

「こちらはこちらで毒しか吐かないし、どう考えたっておかしいわ！
「とりあえず時間がないからここまで、次の休み時間に他のところ
回るからそれでいいだろ？」

「そうですか、何かイラツと……いえ、癩に障るのは何故でしょう」
「さあ、なんで……でしようか、ねえ」

心は脆く崩れ去った。

ミュとスイは口を開かなければ美少女である。ミュは肩までのショートな茶かかった髪をいつも綺麗にセットしている。背丈も女子生徒の平均より上でスレンダーな体系をしている。そのくせ出るところとは出ているというなかなか魅力的な身体なのだ。スイの方は、ミュより頭一つ分背の低い身長で、普通にしていれば愛らしいという表現がぴつたりと当てはまる。髪は黒髪ロングで腰辺りまで伸ばしており、艶やかな光沢をもっている。身体の方は言わずもがな、特定の人が喜びそうな感じだった。

二人とも美少女ということは俺だって認めてもいいと思う。現に授業中の今、ミュとスイは男子諸君の視線を集めている。ミュの方は気にする様子もなかったが、どうやらスイはそうもいかないらしい。妙にソワソワしているし、頭を掻いたりしている。あいつの性格からして恥ずかしがっているのだと俺は思う。

他に分かったことと言えば、ミュが頭がいいということ。転校初日で初授業だというのに当てられても動じることなく淡々と答えを出していく。英語の時間ではテキストの発音も完璧だった。

そしてこれもお決まりというように、スイは勉強ができない。当てられこそしていないが、先ほどから冷汗をタラタラ流しつつノート

を取っているところを見ると、多分できない。
っていうか、悪魔らしく振舞うのであれば勉強なんてしなくていい
と思う。

変なところで真面目な奴だった。

「さて、この問題は……歌音。解いてみなさい」

ちなみに今は数学の授業中だ。スイは勉強を放棄したらしく、机に
突っ伏している。ミユは授業が始まってから一切動いていないかの
ようにピツシリと背筋を伸ばして椅子に座っていた。

「はい、ここは……」

歌音も真面目な奴だった。俺はというとまあ、普通に授業を受けて
いる。普通ってのがどんなものかは想像に任せるが、決して不真面
目ではないということを中心に留めておいてほしいと思う。

「できました！」

「よし、正解だ。流石歌音だな」

「えへへ……」

歌音美里。本当に不思議な奴だと俺は思っている。クラス内や先生
からの評判も良く、元気で可愛気のある女の子。短いツインテール
と光り輝く瞳が特徴である。成績も結構いい方。

そんな子が俺なんかとつるんでいる。いや、言い方がヤンキーっぽ
いな、俺は一般人。えーと、仲良くしてくれているのだ。真面目な
女の子は普通俺のような根暗なのかヤンキーなのかどっちつかずの
ような奴に接してくれるものだろうか。それとも彼女なりの平
等なクラスメイトとしての接し方なのか。そう言えば彼女はいつも
クラス内の全員と一言以上は話を交わしている。彼女なりのスキン
シップなのだ、と俺は考えるだとすると全く不自然ではない。会話
数が多いのも席が近いというだけの話。ただ、俺のような奴と話し
ていると変な目で見られるようになるってことは覚えておいてほし
いね。

放課後、俺は部活に入っていないため颯爽と帰るのだが……だが。

いつもは学校の喧噪から逃れるために早々と帰宅する。しかし、しかしこいつらが俺の家に住み着くとなれば話は別だ。落ち着いていられない。

さて、どうしたものか……。

「あれ、朝浦君？」

学校指定の体育服に着替えた歌音がそこに居た。

確かこいつは陸上部だったな……。それにしても……いや、なんでもない。

「どうしたの？ いつもならすぐ帰っちゃうのに。あ、ひょっとして新しく部活始めたの？」

「違うけどさ……なんと言うか、帰ってもうるさいかになって」

「うるさい？ 朝浦君って確か一人暮らしだったよね？」

「え、あ、まあ……ってかなんで俺が一人暮らしって知ってるの？」

「何言ってるのー？ 前に話してくれたじゃない、マンションに住んでるって」

「そうだったかな……」

覚えていない。他愛もない会話は記憶から抜け落ちていくものなのだろうか。

俺に限ってそんなことは……あるかもしれない。

「……………」

無言で俺の前の席に座る歌音。春だからといってその薄着はどうなのだろうか、せめて学校指定ジャージを上羽織るとか……。

「走ってたのか」

「そうだよー。でもなかなかタイム上がらなくてさあ」

「ふうん……………」

他愛もない会話。

多分これも。明日辺りには抜け落ちているだろう。

「わりいな、やっぱ帰るわ」

「あ、そう？　じゃあ私も部活に戻ろうかな」

「じゃ、また明日」

「うん、また明日ね朝浦君」

俺は歌音に背を向けて教室を出た。

4話：虚像のヒビ（前書き）

毎回思うんですが、タイトルと内容が一致してませんね。 - -
- - A)

4話：虚像のソム

ゆっくりと家に帰ると時刻はもう六時を回っていて、そろそろ食事の用意をしなければいけない時間だった。こんなことを考えるのも、居候が出来たせいでいつもの俺ならばコンビ二弁当で済ませていただろう。何せその居候がうるさいのだ。栄養バランスが万年横倒し状態だとか、食事の時間はキッチリと決めてあるだとか……。にぎやかになったのは言うまでもない話だが。

「ただいまー」

学校でぼーっとして時間を潰してから家へと戻ってきた。すでにリビングの明かりはついていて、そこにはミュやスイが転がっているのだろう。

それよりも食事の用意をせねば。

「お帰りなさい、何の用事もないのに学校に居座り窓から同級生が部活をしている風景を眺め見るだけの非リア充さん」

メイドよろしく玄関で出迎えてくれた天使は、半永久的に毒を生産し、相手に投げつけるといふプログラムが組み込まれているらしい。

「やめろ……………それ心決れるから止める……………」

俺は半泣きで懇願したのだった。

「ふむ。確かに真実というものは時に人を傷つける刃物にもなり得ると天界で糞ジ……………神様が教えて下さいましたね……………」

何やら勝手に納得してリビングへと戻ろうとするミュ。って何のために出迎えたんだっ！

「おい……………なんと言つかさ、居候なんだから家主に対してもっと何かあってもいいと思うんだが」

「何ですか？ 『お帰りなさい（はあと）。あつ、お荷物お持ちいたしますね。晩御飯の心配はしなくていいですよ、私が作っておきますから休んでいてください（さらにはあと）』という具合にメイ

ドよろしくやってほしかったのですか？」

全部ばれてやがる……いや、（はあと）はいらないが。

「残念ながらそんな人は画面の向こう側の新世界にしか存在しませんよ？ もしそういう生活が良いのであれば次元ごとお引越しをお勧めしますが」

「分かった、もう分かった……俺が悪かったから、もう止めてくれ」
帰って早々の猛毒地帯。家のベットで休んでも猛毒は治りませんよーと言われているようだった。

安息の場は……ない。

「では、宿題が片付いていないので」

そう言っつてミユは背を向けてリビングへと戻っていった。俺は玄関でうなだれていた。

ひでえ、ひでえ話だ。

同居・同棲というワードを聞くと何やらよいものに聞こえるが、これは違う。断じて違う。

いつそ変わってもらいたいくらいだ。

うんざりしながらも靴を脱いでリビングに入り、ソファアの上に靴を放つてから台所へ。

冷蔵庫の中身を確認すると、かろうじて今日の夕食分の材料はあった。と、いうことは自動的に明日の朝はトーストに決定だ。またミユに何事か言われそうだが、こればかりは仕方がない。
そうして俺は夕食作りに取り掛かるのであった。

「いただきます」

いつも一人寂しく夕食を食べている俺だったので、静かなのはいいことなのだが、正直誰かが居る時の沈黙は気まずいということを知った。

ということと話題を振ってみることにした。

ミユに振ると一言余計な言葉が付く上に俺のライフが削られるのでスィに話しかけることにした。

「なあ、スィ」

「ひゃわっ……………ってなんだこのやるー！」

「そんなに驚くことでもないだろ……………。まさにソレなんだけどさ、お前学校でもやんの？」

「そ、それってなんだよ。アタシが何だだだだっって？」

「いや、もうソレだよ。キャラ作りの話だ」

「作ってなんかねえよ！これがアタシの普通だ！」

どう考えても虚勢だ。っっていうか、見た目とのギャップのせいでどうしても微笑ましいという感想が漏れてしまう。

幼顔に低い身長、腰まである長い黒髪は綺麗っちゃあ綺麗なんだが……………な。

「だっ、だから。作ってなんかないっ！」

あ、あとそれに加えて声だ。どう考えても小さい子……………ええと、表現としてはアニメ声？

だからこそ、小学生程度の子供が頑張って背伸びしているという印象しか受け取れない。

それでも、悪魔なのだが（らしい）。

「今日の昼休みさ、歌音と話す時もぎこちなかっただろ。無理ならやめればいいだろ」

「あ、アタシはっ、悪魔として舐められちゃいけないのー！」

「あー、そう」

「まとも聞いてないだろっ！」

ぶんすかと怒っているちびっこ悪魔は全く迫力がない。

それに比べてこっちの天使は違う意味で迫力がある。

「なんですか。あまりこちらを見ないで下さい。穴が空いてしまします」

「いや……………」

「本当に穴が空きますよ？ あなたの目に」

「俺の目がよっ!?!」

この調子だ。

天使と言えば、なんだか神聖だとか心が澄んでいると言えばいいのか、まとめれば『優しくて良い奴』って想像すると思う。気品高い、というのか?

それなのにミユは話せば一言目には毒、二言目には毒、もちろん毒毒……………。

口さえ閉じていればすごく可愛くは見える。いや、見えるだけだからな。

肩に付くかつかないかぐらいの茶かかった髪の毛に女の子としては少し高めの身長。スタイルもなかなかではないかと思っ

「ぎゃああああっ! ピーマンが眼球につ!」

「何だか邪悪な気配を感じたので」

なんと言うことだ、野菜炒めのピーマンがどうしてこうも的確に俺の眼球に。

避けられないくらい早いスピードで弾かれたピーマンは俺の黒目を覆った。

「視界が緑に……………」

「食べ物が無駄にしてはいけませんよ」

「誰がやったんだ、誰が」

ミユは心を読むのかもしれない。そりゃあ天使だったらその程度のことぐらい出来るのかもしれないが……………。

「そ、そう言えばお前達。金は持ってんのか? 俺は弁当なんざ作らないから学校での昼は購買か食堂なんだけど……………。ないなら渡さなくちゃいけないし」

「いえ、心配には及びません。糞ジジイ……………いえ、神様からいくらかいただいていますので」

「容赦ねえなお前……………」

「そっだよ、ぜ! だからお金のことは心配する必要はない。」

必要なものがあつたら自分たちで買うからな！」

「俺はお前のキャラ作りの弱さが心配だ」

会話で詰まるのはどうなんだろうか。話す前に考えるべきだと思つ。

「なあっ！ 今のはせーふ、せーふだっ！」

完全にアウトだった。

こうして夜も更けていく……………。

「と、いうことで居候のお前らにも働いてもらおうと思つ」

夕食を取り終えて、各自リビングでゆっくりしていたところへ声をかける。

スイはソファーから起き上がって、ミユは机に広げていたノートから顔を上げて、俺は台所で仁王立ちをしていた。

「チッ」

「おいそこ！ 舌打ちするな！」

「だ、駄目だよミユちゃん。住まわせてもらってるんだから……………少しは何かしないと……………ハッ！」

「いや、もう遅いから。全部言い終わってから気付くの遅いから」
駄目だこいつら……………。

とりあえず気を取り直して……………。

「何もそんな大きなこと頼もつってことじゃないんだ。家事を少し手伝ってくれればいいんだよ。夕食とか朝食とかは俺が作るからさ、掃除や洗濯は分担しようって言ってるんだよ」

「なるほど、盲点でした。もし全てを任せていたのならば洗濯の際に陽助さ……………下等……………が私たちの下着でハアハアするかもしれませんしね」

「ひいっつう。気持ち悪いよお」

「するかそんなこと！ っつか無理に毒吐こうとするな！」

会話で消費するエネルギーがこんなに大きなものだとは知らなかった……。

「だ、だから。とにかく、洗濯に関しては洗濯物籠を分けて用意しておくから、分けて洗うこと！俺は自分で自分の分をやるからお前らは自分たちの分をやってことだよ！」

「そうですか」

「ああ、そうだ。あと、掃除に関してだけどこれは風呂掃除のことな。俺ら三人でまわしていくからな」

「何かと細かいですね。もっと大雑把なのかと思っていました。見直しました」

「そりゃどーも」

どうにも褒められている気がしない。皮肉っていつのか？

「では、今日は私がやりましょう」

「え？」

「何か問題でも？それと追加注文ですが、お風呂は必ず私たちが先に入ります。気持ちが悪いですから。それと覗きやラッキースケベ回避のために私達が入浴中は自分の部屋から出ないでください」

「ああ、……………それに関しては仕方、ないのだが……………言い方ってもんがあるだろ」

言い終わるとミユは風呂場へと向かっていった。

まあ、これで生活にあまり支障は出ないと思う。面倒なことは早々に回避しておかなければならないからな。

それより、ラッキースケベってなんだ……………？

ラッキースケベについて考えていると、ちよいちよいと袖をひっぱられた。

「ん、どうしたスイ？」

「ミユちゃんね、あれでも多分ホツとしてるんだよ、あなたがまともな人で。口には出さないけどよかったって思ってると思うよ。…

……………ハッ！

「ハッ！じゃねーだろお前！絶対わざとだろっが！」

「 違え！ そんなこと思ってない！ アタシは……ええと、あれえ
ー？ 」

「 馬鹿かお前は！ 」

マンション三階の朝浦家はいつもより数倍騒がしかった。

5話：先行少女（前書き）

夏休みが終わりました。（、・・・）
学校始まるううー

5話：先行少女

「うーむ」

雲ひとつない晴天の昼、朝浦陽助は屋上のベンチで一人考え込んでいた。

陽助の気持ちとは裏腹に澄み切っている空はいくらか憎たらしげで、陽助の目つきをさらに悪くした。

今このタイミングで屋上に人が来ようものなら風景と人物とのギャップに恐れを抱くだろう。そしてこれも言うまでもなくその人は逃げ出すだろう。

天使と悪魔との共同生活が始まってから一週間が過ぎた。特に正体がばれることもなく、同棲がばれることもなく穏便に日々は過ぎていった。

そのところは陽助も文句は無かった。しかし、変わったことが一つ。噂の広まり度合いと内容の誇張だ。

ヤンキー朝浦が美少女三人を昼休みに連れ回しているとか、いずれは校内の女子全員をひきつれてハーレムを狙っているとか、天崎美由に様付けで名前を呼ばせているとか（これはミュがわざと呼んだために広がったものである）。

色々とよくない噂………何故か女関連のことばかりが出回っているそうだ。

だからこうして今の時間帯は屋上で一人飯を食っていたのだ。一緒に居るとまた変な噂が広まるかもしれない。

今思えば、転校初日にミュとスイが絡んでこなければこうはならなかった。しかも俺は忠告したし。

不機嫌になる。歌音までもが巻き込まれていることも気付いたからだ。

ガチャ、

「今日はいい天気だな」

「そうだな、こんな日は屋上で授業をサボるにかぎ

って、わあああつ！」

「何が

って、ひいひいっ！」

俺の姿を視界に捉えたたとたん男子生徒が二人ものすごい速度で去っていった。

自分で思った通りの現象を目の当たりにして、テンションも下がる。普段からテンションが低い俺にとってはよくないことだった。これでテンションゲージは0に、午後の授業には耐えられないかもしれない。

はあー　　と深いため息を吐き、ベンチにもたれかかって空を見上げる。

高く、遠く、澄んでいて届かない世界。　　そういえば　　と思いだす。

神の爺さんと会ったところもこんな風に綺麗な空が広がっていた。天界と言っただろうか、あれはどこにあるのだろう。この空の上？　　それだと俺が見た天界の空の理由が説明できない。もしかして夢の中だとか？　　それだったら説明はつくが、なんだかメルヘンチックだ。

とはいえ、天使と悪魔と暮らしているこんな状況なのだから何があっても驚かない気はするが。

要は、なんでもアリってことだろう。

「朝浦陽助っ！」

凜とした声が屋上に響き渡った。

俺は何事かとおっさにベンチから身体を起こし、辺りを見回す。声の主は屋上の入口にいた。

長い黒髪を後ろに束ね、ポニーテールと呼ばれる髪型をした彼女は両腰に手を当てる仁王立ちをしていた。

前、横ともに髪は規定内の長さで留め、ひざ下までの女子高生にしては長いスカートを履き胸元のタイも歪んではない。それでいて可愛らしさと言うか美しさを出すのだから女と言うのはとんでもない。

だがしかし、俺はこの女生徒と知り合いではなかった。それゆえに何故名前を呼ばれたのかが分からなかった。

「え、えつと。何事ですか？」

動揺を隠そうと試みるが返って裏目に出て、声がひっくり返ってしまった。

ベンチから立とうとするが、止められる。

「動くな！……そこに座ったままでいい」

何、何これ。今から何が始まるんですか。この人の居ない屋上で何が！

「お前だな、女子生徒を一気に三人も連れ回して不純異性行為に勤しんでいる朝浦陽助と言うのは」

「ちょ、違つ。何その誤解！？いつの間にそんな悪性の強い噂に派生したんだよ！」

前より格段にレベルアップしすぎだろ！

「証言者がいるんだ。彼女たちの転校初日に声をかけ、校内を案内すると見せかけて……そんなことおっ！」

「色々おかしい！俺から声をかけたわけじゃねえ！あいつらが勝手に」

『死ねばいい』

「え？」

なんだ、今のは。

氷点下を思わせる冷たい声色で願うようにして囁いたのは、誰だ？

「なんと言うことですか！ あつちから言い寄ってきたからと言って弄ぶのですか！ くううう……………このような下半身が本体であるような男はすぐに成敗されるべきだ。くそう、武器さえあれば……………」

空耳か？ つ……………ていっかなんだこの展開！？ このままじゃあ俺が一方的にやられてしまう。というか、俺の話を聞くこともしてくれねえ！ 噂って言うものはここまで邪悪なのか……………。

何か、打開策は……………。

ガチャ

「あー、朝浦くんここにいたんだ。ちっとも姿が見えないから探してたんだよ？」

屋上への扉から現れたのは歌音だった。小さなツイントールを揺らしながら太陽の眩しさに目を細めていた。

ナイスタイミングだ、歌音っ！

心の中でそう叫び、ヘルプを出す。

「あれ、結穂ちゃん？ こんなところで何してるの？」

「美里っ、危険だ！ 近づいてはならない、この男は歩く生殖器だ……………」

「何を口走ってんだこの女は！ っていうか歌音、助けてくれっ」

「え、え？ 何がどうなってるの！？ とりあえず結穂ちゃん落ち着いて……………」

「と、言うことだ。俺は何もしてはいない、無罪だ」

一通り歌音がこの委員長気質の女子生徒に説明したところで落ち付いた。

「うっ、……………美里はそんなことないと言っているが、実際のところは分からないではないか。脅されているだけかも……………？」

「ち、違つよ結穂ちゃん。朝浦くんは顔は怖いけど悪い人じゃないよ」

「確かに犯罪者級の人相の悪さだが……」

「ほつとけや！ 俺の顔の話はいいだろうが！」

屋上のベンチに三人並び、討論会が始まっていた。

ところでこの先行少女は芹川^{せりかわ} 結穂^{ゆいほ}と言うらしい。同じクラスではなく、隣のクラスで学級委員長を担っているのだとか。歌音とは一年生の時に知り合ったらしく、仲がよいのは家が近いこともあるからだそうだ。それにしたって突っ走りすぎだろ……。

「わっ、また舐めまわすような目で美里を見てる……いや違つ、私を見てる！？」

「見てねえよ！ どうしてお前はそうなんだよ、なんか俺に恨みでもあんのか！」

「あ、あはははは……」

早くも仲介役を放棄しようとしている歌音を救うかのように、予鈴が鳴った。

「さて、時間だし教室に戻ることにはしようか。美里、気をつけてね」

「大丈夫だつて結穂ちゃん。元はと言えば私が朝浦くんに構つてたから仲良くなつたわけで」

「もう俺先戻つてるからな……」

疲れ果てた身体と脳を休ませようと屋上から逃げるようにして引き上げる。屋上の扉を閉めた時に何か聞こえた気がしたが、気のせいだろう。疲れすぎて幻聴を聴いたに違いない。

階段を降りながら思ひ出したことがあった。

「一年の時に歌音と一緒にだつたつてことは……俺とも一緒にだつたつてことだよな……？」

何故だか彼女のことは覚えていなかった。

教室に戻ると各々が席に着き始め、授業の用意を始めているところだった。真面目な奴になると、すでに教科書をひらいて予習をしていたり、ノートに質問点などを箇条書きしている奴もいた。

「あら、どこにいたんですか」

「屋上だ」

自分の席に向かう途中にミュが顔も上げずにそう訊いてきた。なので俺も顔を向けずに呟くようにして言った。

「ぼっち……（ボソリ）」

わざと顔をそらしてそういうのが聞こえた。

違う、断じてそんなんじゃない！ お、俺はお前らを巻き込まないために……。

実際悪化した噂も飛んでたしな。

ミュは相変わらずだったので、スイの方を見てみた。

寝ていた。

お昼寝ですか？ ここは学校ですよー、と教えてやりたいが俺が声をかけると素っ頓狂な声を上げるので放っておくことにした。教師に当てられておろおろするがいいさ。

若干ダークな気分なまま席に着き、授業の準備を始めた。

少し遅れて歌音が教室に入ってきた。

6話：逃げるが勝ち

「ただいまー！」

「ただいま帰りました」

「ただいまっ……」

スイ、ミユ、俺と順に帰宅の挨拶をし、リビングへ向かう。

今日は急遽授業の終わりにホームルームが追加され、いつもより帰る時間が遅くなったため三人で帰ってきたという次第である。これを目撃されていたらお終いだな。同棲とか普通シヤレにならないからな。

ドラマ、アニメ、漫画などとは違ってそんなおいしい展開は存在しません。これは俺の教訓です、皆さんしっかり心と心に刻んでおきましょう。

「さあ、夕食です。働け」
ほらね。

「腹減った、今日はすっごい疲れたよー。ホームルームの長さってどうしてこうなんだろうね。うっざいったらありやしない……ねえ、今完璧じゃなかった？ 悪魔みたくなかった！？」

もうソレ言ってる時点で破綻してますけどね。

途中までは別人のようだったのに急にいつものスイに戻った感じだった。

「ふう、帰ってきてそうそう料理か。俺は忙しい主夫だったの」

「そんな凶悪面の主婦はいないと思います」

「変な所に突っ込み入れなくていい！ ってか主婦じゃなくて主夫！ 性別考える！」

「わー、差別してますわこのかたー」

「すっげえ棒読み！？ どうやんだよそれ、今度教えてくれよ！？」
「拒否します」

「皮肉だよっ！」

大きな鍋に水を張り、コンロで強火に。

その間にフライパンではひき肉を細かくして炒める。

「今からお鍋作るの？ 腹へってまてねーぞ！」

「違う。簡単にミートソーススパを作る、あとお前それ演じれてると思ってるかもしれねーが『お鍋』だなんて悪魔は可愛らしくいわねーからな」

「うぐっ……うるさい黙れっ！」

頬をほんのり紅く染めて怒るスイ。あー、やっぱりいい加減『女生徒』というより『女の子』って感じだな。

「生卵投入するからな！ アタシには生卵入れるんだからな！」

「わかったわかった」

最近分かったことだが、スイは異様に生卵に凝っている。この間はおでんのためごが中まで火が通っていたのでキレていた。どうやら生々半熟までの間しか認められないらしい。

確かに半熟たまごは何にかけてもおいしいとは思うが………ちよつとこだわりの過ぎではないだろうか。

「ミユはどうする。なんかトッピングいるか？」

「では、チーズでお願いします」

こちらはチーズ中毒だ。何にでもチーズをぶっかけ、食べる。

確かに卵同様にほとんどのものに合うということは分かるのだが……

……カロリーとか考えなくても……いいんだろうなあ、天使だからまあ、今回はミートソーススパだからどちらをトッピングしてもおかしくはないだろう。

パスタが茹であがり、さらに移すと水蒸気が立ちあがる。その上にフライパンで少し温めたひき肉+トマト+etc. をかけるといい匂いが辺りを包む。

ごくりに、と誰かが生唾を飲み込む音が聞こえた。

「さ、さて、準備もできたし運んでくれ」

「お、おうっ………さーて、たまごたまごっつと」

「チーズをぶっかけて、と」

予想以上にみんな、腹が減っていた。

「ご馳走さまでした」

腹を満たして満足した俺たちはリビングでごろごろとくつろいでいた。まあミユはいつもどおりリビングの机の上で教科書とノートを開いて落ち着いた様子でペンを動かしている。

そしてスイはというと、こちらまあいつもどおりリビングのカーペットの上でクッションを枕に寝転がっていた。

ミユは私服に着替えたが、スイははまだ制服のまま寝転がっている。明日も学校があるというのにそのままだと制服にしわが出来てしまふ。

「おい、スイ。さつさとその制服脱げよ」

「ひうつ!? いきなりなんですか! 何の誘いですか!？」

「何がだよ!？」

「そそそそんな、た、確かにこんな恰好で無防備に寝転がっていたら年頃の男の子ははつじょうでわたしがあぶなくなっぴひーになりますがかがが……!」

「いや、意味分からんし落ち着け! 俺は制服がしわになるからさつと脱いで部屋着に着替えろと」

「制服にし興味なしですか!？ 私の身体なんてどうでもよくてとりあえず脱ぎたての制服ならなんでもおっけーみたいな変態さんでしたかつ! ひいひい」

「一言もいってねえ! おい、ミユ。なんとか言っ……っ……っいねえし!」

リビングには俺とスイだけになっていた。

騒ぎ出したから勉強の邪魔になって自分の部屋に戻ったのだろうか。「やばいです、危ないです、このままじゃあ変態さんに犯されます

!っ!」

「やっべ、もうめんどくせっ！ 収集の付け方かんねえ！ 誰か助けてくれっ」

ぎゃあぎゃあど騒ぎ立てていると、リビングと廊下をつなぐ戸が開かれて。

ガスツ、と俺の頭に英語辞典が突き刺さった。

「うるさいです。近所迷惑です。このハネケイソウがっ」

ミュがお怒りになっていた。

そして英語辞典はものすごい凶器になり得ると俺は身をもって知った。

「痛って……………」

頭をさすりながら風呂掃除をしようと洗面台のドアを開けるが、そこにマッ リンがなかった。いや、容器はあったが、中身が空だった。

「あれ、無くなってたのか……………買い置きもねえ。仕方ないな」

一旦リビングに戻って、確認。

「おい、ジツク ンないんだけどさ。最後に使ったの誰だ？」

「ああ、私ですけど今日の朝確かに言いましたよ。お風呂の洗剤が無くなってますよ、と」

「そうだったのか……………いや、普通に納得したけど言ったの朝なのかよ」

「問題はないと思いますけど」

「それはこっちが決めんだよ！ まあ、いいや買ってくる」

「今からですか？ じゃあ早く行ってきてください。そして早くお風呂を入れてください」

「言われなくてもそうするが」

とりあえず買いに行く旨を伝えてリビングから出

って！

「お前朝言ったのって『バスが無くなりましたよ』っじゃなかったか!？」

俺がそう問うと、ミュは悪びれた様子もなく。

「ええ、ですからバス・マジ クリ でしょう？ 略してバスです。確かその時俺は、『バス？ 俺たち歩きで学校行ってんのになんか関係あるのか?』って返したはずだ。

バスってそっちかよおおっ。busの方じゃないのかよっ！

「わざとだろっ！」

「何を フツ 言ってるんですか」

「笑ってんじゃねーか！」

「早く入ってきて下さい。っていつか行け。間に合わなくなるでしょう」

「何にだよ……。今度からはちゃんと伝わるように報告すること！」

「分かりました早く行ってきてくださいこの腐葉土が」

なんつう天使だ……。こいつぁひねくれてるね！

近くのドラッグストアまで徒歩数十分なのだが、体感時間は結構長く感じたりする。なんせ夜だし、静かだし、何よりも一人だからだ。今まで一人だったのに何言ってるんだ、と自分に毒づく。確かに今まで一人だった。でもあいつらが来てから時間が早く過ぎていくように感じられる。誰かが言った『楽しい時の時間は短く感じる』って奴かもしれない。まったくらしくないと思う。

などと色々なことに頭を巡らせていると、女性の声が聞こえた。

「あなた達っ、こんなコンビニの前で座り込んで迷惑になるとは考えないの？」

どこかで聞いた声だった。えーと、確か今朝に聞いたような気がしなくもない。

なるべくトラブルには関わらない主義なのだが、何故だか気になった。

そーっとコンビニの近くまで寄り、街路樹に身を隠して様子を窺う。その女性は長い黒髪を後ろで束ね、ポニーテールと呼ばれる髪型をしておりつてあれは芹川結穂じゃねえかつ！

何してんだあいつはあつ！ わざわざあんなモロ不良ヤンキみたいな奴らに関わりに行かなくてもいいじゃないか！ 数は………3人もいるし。髪の毛の色が赤だとか茶色だとかなんかカラフルだしっ。

「んだ、お前。文句あんのかア？」

「文句があるから言ってるの！ 邪魔になってるの！」

「この女……舐めてますよねえ！ ナニ？ いい気になってんのかなあー！」

男たちの一人、茶髪が芹川の腕をつかむ。

つてアレ、なんかおかしい奴一人混ざってないか？

「きゃっ、ちよつと、離しなさいよ！ こんなことしてただで済むと思ってるの!？」

「へえーえ、どうなるのか教えてほしいなア」

「よく見たらこいつ結構可愛いじゃねーか。どれ、俺たちがちよつと……」

「触らないでっ！」

振り回した芹川の腕が赤髪に当たる。大したダメージにはならないし、赤髪もそれを知っていて避けなかった。

「いつてーな、ぼつりよくはんたい。っていつてもこの女から仕掛けてきたからしかたないよなア？」

同意を求めるとに他の男たちに言いかける。他の男たちもにやに

や笑いながら答える。

『触らないでって、言ったでしょ。気持ちが悪い』

「あ?」

「お?」

赤髪、茶髪が同時に疑問符をつけた言葉を発する。それに構った様子はなく芹川は、

「ちょっと、店員さん……なんで助けたくないの?」

コンビニ店員に助けを求めていた。しかし、コンビニの店員は気弱そうで、先ほどからチラチラ様子を窺っているものの飛び出してくる気配はなさそうだった。

これは、万事休すってやつだな……。

この時間帯、歩道には誰もいないしコンビニの客もいない。店員は使えないし、不良どもは三人。

おいおい、俺ってこんなキャラだったかなあ。誰かを助けてやれる奴だったかなあ。

「つかできるのかよそんなこと。いや、出来ないことはないような気もしなくはないけども……あーっわけわかんなくなってきた!

「へへへ……この時間帯じゃあな。誰もこないし」

「そうだなア。では、この女の

「だ、だっ、誰か助けてっ……………」

芹川結穂の声が震えていた。

俺は何故だか走るのではなく歩いてコンビニの前まで向かっていた。そして一言。

「や、やあ。 芹川。その人たち知り合い?」

なななな何やってんだ俺は

っ!

なんでナチュラルに話しかけてんの!?　ここは走っていて驚いている間に芹川助けて戦闘無しに逃げるのが一番なのにつ!

イカン、俺もなんかおかしくなっているらしい。普通に意味不明な行動取ってしまった。

しかし、もう収集はつかない。それならいつそのままつ。拳を握りしめながら相対する。

「しっ、知り合いなわけではないでしょ!　助けてよっ!」

「ああん?　兄ちゃんさア、今俺らお楽しみタイムに移行しようとしているワケ、見ないふりしてあっちいったいった」

「そうだぜえ、まさか三人相手にやるうってんじやないよな?」

「確かに、三人はつらい、つらいけど……。俺の噂が改善されんなら、よくな?」

握りしめていた土を茶髪にはら撒き、そのままタックルをかます。降りかかった土に気を取られていた茶髪には避ける術もなく、

「うお」

バランスを崩した茶髪は芹川を離し、よろめく。そこにすかさず肘をたたき込み、一気に詰める。

「っおらっ!」

茶髪はコンクリートブロックに躓いて後ろから倒れていった。頭は打っていないだろうか。

大丈夫だろうと願いつつもまずは一人。

次は、と振り向くとそこにはもう赤髪が待機していて、

「ッシュ」

「がっ!」

赤髪からのボディブローを受け、身体が折れ曲がる。そこに上から拳が振ってきたので転がってかわす。が、しかしかわした先にはもう一人の男がいて、足を上げていた。

踏みつけられるっ!

そう思った俺は、男の軸になっている方の足を狙って倒れた状態のまま蹴りを入れる。

面白いように膝が折れて男は地面に転がる。すぐさま立ち上がろうと迫ってくるが、ここはごめんなさい、顔面を蹴り飛ばして黙らせる。

「っつらー！」

「あぶなっ！」

またも赤髪のブローが真横から迫ってきていた。それを間一髪で避け、距離を取る。さて、最後の一人まで絞れたならもうこれは勝ちだ。そう、勝ち。

絶対に負けることはない、何故なら。

「っつてことで逃げるぞ芹川っ！」

「え、何、引つ張らないでっー！」

逃げるが勝ち、だから。

7話・日常での籠城（前書き）

テスト期間入りました；

更新速度がかなり低下するつえに内容が薄くなっております。

どうかご了承のほどをお願いしますm（）（）m

7話・日常での籠城

走って走って、さらに走って走って。自分の体力の限界に嫌気がさしながらも走ってたどり着いたのは駅前だった。

ただ闇雲に走ったわけではなかった。人通りの多い場所に移動したかっただけなのだ。ここならば交番も近くにあるし、人も多いし、なんとかなると思ったからだ。

それにしても疲れた。

あの赤髪から逃げるのにどれだけ走っただろうか。うちのマンションは駅から1km付近にある。先ほどのコンビニはうちのマンションより駅寄りなので……あんまり走っていないかもしれない。まあ、そんなことよりも今は逃げ切れたことに喜ぼう。

「ちよつ……あなた、朝浦っ……なんのつもり!？」

「なんのつもりって……助けてっていったじゃん」
息を切らせながらも会話を続ける。

何故だか芹川は目を潤ませながらも眉を吊り上げている。

「べ、別にっ……」

「っーか、なんだよあれ。わざわざ絡みに行く必要あったのか? いくら学級委員長だからってそんな……」

「嫌なの」

すっ、といつもの掴みかかってきそうな勢いは消え、目は光を失っていた。

その目は、知……っている。

最悪なもの、苦しくても忘れられないもの、自分の中の枷、そんなものを抱えている目だ。

「ああいうの、嫌なの。誰のためにもならないようなことを平気でやって、迷惑掛けて、誰からも煙たがられて、……性根の腐った

ような奴ら。死んだっていいような奴らがいることが、そこに存在していることが嫌なの」

「そんなこと……言ったら、駄目だろ」

「……でもね、嫌なの。 気持ちが悪いの。 朝浦陽助もそんな奴だと思つてた」

「へ？」

俺？ 何故にいきなり俺？ 今シリアス展開じゃなかったのか。つて、ああ、アレか。噂のせいとか、そんな根も葉もない噂のせいで初対面で殺されかけたのかっ！

「でも、少しは違つた。 今でも何か考えてるんじゃないかっけ。 持ちが悪い。 ……ううん、言い過ぎつてのは分かるんだけど……でも違つたの。 少し、ね」

「意味が分かんないんだけど……どういう？」

「なんでもない。私、こつちだから」

そついうとポニーテールを翻して彼女は背を向けて行つてしまった。何故だか、学校に居る時よりも幾分かその背中小さく見えた。

俺の、幻覚だろうか。 考え過ぎだろうか。 それでも、見えたんだ。

「あ、バス・ジツ リン……買い忘れた」

家に帰つたころにはすでに10時を回つており、怒りのオーラを無言で発するミュとソファーで転寝するスイに出迎えられた。

「い、いや……これにはわけがあつてな？」

「早くお風呂を洗つてください。 ついでにあなたは人間から足を洗つて下さい」

「俺に死ねと!? 確かに遅くなつたのは謝るけどさ!」

俺が洗剤の有無に気付いて買いに行こうとしたのが9時だった。つまり、一時間経過しているということだ。そりゃあ一時間も待たされたら腹が立つだろうが……仕方ないじゃん。

「まあ、いいでしょう。私は早く寝たいのでお風呂を早く沸かして下さい。二回言いました、この意味が虫けら陽助様に理解できるようにしようか」

「わ、分かった。すぐにでも……」
あまりにもオーラが絶大すぎて、毒に対しての突っ込みすら忘れていた。

それにしても、あっさりと許してくれたな……。それはそれでラッキーだが。

だがそれは、今日の話である。

「起きてください、おつかいレベル0さん。早く起きないと私の光速の拳があなたの鳩尾にツシュ！」

肺から空気が絞り出された。

「つぐはう!? ……な、殴ってから言っなあああっ!」
ヤバい、言ってから拳を放つまでのタイムラグの無さがヤバい。

こいつはキレてるね、昨日は許してくれたんじゃないやなくて保留にしてくれたってところかっ!」

「わ、分かった。起きるけども、……もとはと言えばお前が洗剤のことをややこしく言うから」

「そうですね、では。……ああ、スイも起こしてきてくださいね。私はリビングで微動だにせず待ってますから」

シカト、いくない。
いじめ、いくない。

「な、なんてことだ……居候のくせにっ!」

俺は多分怒ってもいいと思うんだが。

「はあ、……性格なんだろうな」

どうしてか怒る気になれない。　なんと云うか、なんだろうか……

「あんまり人と接することがないからかなあ……」

独り言をつぶやいてみる。　多分、そう思うのならそうなのだろう。　ベットから起き上がり、ハンガーにかけてある制服を手取る。　とりあえずボンとワイシャツだけを着て部屋を出ようとする。

あ………れ………？

部屋のドア、少し隙間が開いて………？

目が合った。　隙間の向こうから覗く目と。

「独り言……。流石一人ぼっちですね」

目がそう言った。　っておい！

「お前はリビングで微動だにせず待ってるって言ってただろうが！
？　なんで人の部屋覗いてんだよ！」

「いえ、朝ですのぞ」

「いや、全く意味が分からんのだが」

「まあそういうことにしておきましょうか。　長いこと出てこなかったものだから色々と気になりました」

これ以上の詮索はやめよう。　………というか俺はなんで後手に回ってるの？　くっ、こいつ。

ミユと正面に向き合う。

よく見ればこいつ、可愛いんだけどなあ……。　前にも言ったけど毒がね。

「な、なんですかー。　そんなに見つめられたら照れてしまいます
うー」

「棒読みで言われても反応に困るわけだ」

「そうですね」

「そうですね」

「では」

「おう」

そのままミユは食卓に付き、俺は隣の部屋へ。部屋のドアの前に立ったところで、思い出す。

スイは確か寝起きは暴走していて何度変態扱いされたことか。というか、俺が起こしに行くから問題になるものであって、ミユが行けば万事解決じゃね？ とは思うのだが、ミユは……。食卓の椅子に腰をかけて微動だにせず待っている。

これは、駄目だ。

そもそも、俺のことは起こすくせに何故にスイは起こさないんだ。

同じ部屋で寝てんだから自分が起きたついでに起こせばいいものを……。

文句ばかり垂れ流していても仕方がないので、一応ソックスをしてからドアを開ける。

案の定、幾重にも積み重ねられた布団の中で虚勢張り悪魔は眠っていた。というか眠っているのだろう。

分からない。ここからじゃあ見つけれない。

この山から探し出さなければならぬ。これが面倒でおそらくミユは起こさないのだろう。

つていうか、なんでこんな布団を……。引つ越し当初はこんなことがなかったのに。

「おい、スイ！ お前は布団の中で籠城でもしてんのか、はよ起きろ！」

一枚ずつ引き剥がしながら声をかけるが、見つからない。

布団を引き剥がしているうちに、何か見知ったような感覚がした。何か、食べ物に似てないか……。これ？

「きゃべつ……？」

城からキャベツ城へとレベルダウンした。

きゃべつがモチーフなら、馬鹿悪魔は中心にいるのだろう。

均等に布団をはがすことを止め、一気に中心部まで捲る。

中心には小さなスペースがあって、そこに丸くなるようにしてスイ

は眠っていた。

「窒息死するだろこれ……つてうえええつ!？」

この間俺は注意した。寝るときは下着だけではなくパジャマを着用せよと。

多分寝る前には着ていたのだろう。だが、それはスイの寝相の前には無意味なのか!？」

何故にパジャマのズボンがずり落ちている!？」

そしてまたも計ったようなタイミングでスイは目を覚ます。

「ひっ……。また朝這い!？ しかも下から脱がすという上級者!？」

シュバババ、と表情を変えながらも最終的に行きついたのはやはり涙目だった。

「何が上級者!？ つうか、このパターンはもういいよ!？」
カシャ、と背後で音が鳴る。

恐る恐る振り向くと、そこには。

「少女を襲う目つきの悪い男子学生……」

微動だにしないと公言していた彼女がいた。

「何撮つてんだてめえ！ それはシャレにならないから消せ、いや消して下さい!？」

「これで私は絶対的支配者確定ですね」

「不吉な言葉っ!？ 俺を社会的に抹殺するつもりかっ!？」

「……………」

「なんで何も言わない!？」

また、にぎやかな朝を迎えることとなった。

8話：あだ名の付け方（前書き）

テスト勉強の合間に投稿です。

かなり更新に間隔が開きました、申し訳ございません。

次はテストの終わった水曜日夜に更新できると思います。

皆さまどうぞ次もよろしく願います。

8話：あだ名の付け方

ミュ、スイと時間帯をずらして家を出たせいでいつもより早めに登校する羽目になってしまっていた。

こういうのは普通、家主である俺が後から出るべきなのだがスイがまだ寝ぼけて歯ブラシの柄の方に歯磨き粉を付けて歯を磨いているというカオス極まりない状況だったので、後のことはミュに任せてさっさと俺は出ていったわけである。

あのまま待っている、時間帯をずらした時に遅刻になる可能性があったからな……。

出来るだけ悪い印象は他生徒や先生に与えたくない。俺だって真面目に学校生活を送っているんだ。

それに、前の噂の件もあるしな……。

そんなことを考えつつ歩いていると、昨日のコンビニが見えてきた。ああ、……あの不良達って普段何してんだろうな。ここで待ってたりしないよな？ っていうか、うちの生徒ではなかった気がするんだけど。

そのとき、ザッ と昨日俺が様子を窺うために隠れていた街路樹の後ろから人影が現れた。

「！？ ほんとに昨日の奴らが現れていなかった。」

以外にも、木陰から現れたのは昨日俺がここで助けた芹川結穂だった。

「何してんだお前」

そう呼びかけると、彼女はビクッと身体を震わせてこちらを窺うようにして見つめてきた。

「べ、別に……」

「それ昨日も言ってただろ」

「昨日ここで朝浦にあったから、ここに居たら会えるかなって思っ

たの！」

「は？」

「へ？」

この通学&通勤時間帯の交通量の少なくない通りの真ん中で彼女は何を言っているのでしょうか？

ほ、ほら。昨日とは違うコンビニの店員も何事かとこっちを見ているじゃないか。

通りすぎる女子中学生がにやにやしながらこちらを指差しているじゃないか！

「お、お前は一体何を……」

「違う！ そういう意味じゃなくって。お、お礼を……言おうとしただけなんだからっ！」

彼女は頬を赤らめながらそう叫ぶと、走り去って行ってしまった。

わけが分からない。っていうか、お礼なら昨日の夜にそれっぽいことを言ってくれた気がするが？

それにしてもなんなんだ、わざわざこんなところで待っていないくても学校で言うなりすればいいものを。

くっ。今度はコンビニの店員がにやにやしてやがる……。周りの不可解な笑みに包まれながらも、俺は学校に遅れないよう歩みを速めるのであった。

いつもよりだいぶ早く教室についてしまったので、特にすることもなく机に突っ伏していたところ、

あれ、なんで隣のクラスの学級委員長がここに？ だとか、相変わらず美しいなア……といった声が色々な方向から聞こえてくるので顔を上げてみると、そこに今朝の彼女がいた。

何故か赤い顔をして。

「なんだ、まだなんか用があんのか？」

「え、えつと……。昨日は助かったわ、朝浦のおかげで……。何事もなかったわ」

「俺は何事かあったけどな」

「だ、だから。あの……。その……。今日の……」

「シカト？」

「だ、だからっ！」

「おう！？」

芹川が何かを言わんとしたところで教室のドアが思いっきり開き、これもよく分からないのだが元気いっぱい歌音が入ってきた。

「おつはよー！ あれ？ 結穂ちゃん、このクラスで何してるの？」

その後ろからはミュとスイが並んでいた。どうやら一緒に登校してきたらしい。

まあ、歌音のことだから元気いっぱいなのは『転校生と一層仲良くなれたから』だろうと察しはつく。

それにしても、一気に騒がしくなったな……。早めに話を付けるため、芹川に先を促す。

「んで、なんだって芹川？」

「や、やっぱりなんでもないっ！」

芹川はやはり叫ぶようにして台詞を吐きその場から退散する。

それを今朝と同じように見送ってしまう俺。さっきからループしてね？ これ。

「あれ？ 結穂ちゃん、結穂ちゃん！？」

友達がいきなり爆走したとしたら流石に驚くだろう。歌音も目を丸くしていた。

っていうか、なんでお礼ごときでこんなに遠回りになってるわけですか？

別にいい、って今朝も言ったはずなんだけどなあ。

「はっはーん。分かった、これは……。昨日だねっ！」

急に歌音が何かを悟ったようで、笑顔のまま俺に人差し指を向けてきた。

ビシッ、つと突きつけられたその指に俺はたじろぎつつも、訊いてみる。

「な、何が昨日なんだよ？」

昨日は確かに芹川を助けたが……それがどうした。

「そう、結穂ちゃん……そうなんだね」

「おうう！？ なんだお前、いきなりテンション上げんな！ 朝から本当にどうした……」

「おはようございます、鈍感朝浦さん。相変わらず極悪人面のくせに青春を謳歌していると思うと吐き気と鳥肌が一気に襲ってきてますね」

「ちよちよ、ちよつとまでお前！ なんで俺はそんなに罵られなきゃいけないんだよ！」

「ふ、ふん。 おはようだぜ、朝浦。 ……きよきよきよ、今日も、(うい)……」

「お前は無理に言わなくてもいい」
強烈な毒舌をふるってくるミュと、今日も悪魔っぽく振舞おうとしているスイ。

いつも通りの日常のように感じられるが、違う。なんか違う。

「これは……何が起きている？」

俺には理解できそうもなかった。

「それよりも歌音。 えらくご機嫌だよな」

「え、うん。 美由ちゃんと優美ちゃんと登校してきたんだよー！ やはりそうだったか。 人と仲良くなることで幸せになるってお気楽な奴だよな。」

「それにしても美由ちゃんと優美ちゃんて名前似てるよねー。 たまに間違えちゃいそうだよ、だってひっくり返したただけだもんね。 あだ名つけようよ、あだ名。 仲良くなつた記念にねー！」

俺も思っていた。 学校でミュ、スイ、と呼ぶことはできないし何かいい方法は……あった！

ミュ、スイと俺があだ名をつけてしまうことである。

「俺が、あだ名をつけてやるっ」

「お断りします」

息継ぎの一瞬の隙間についてこいつは断りやがったっ……………!?

「待て、いいあだ名かもしれんぞ」

「そもそも朝浦さんとはお友達になつた覚えがありません。他人からあだ名をつけられるときは辱められるときだけと相場は決まっています」

「美由ちゃん……それはひどいんじゃないあ？」

「いいえ、万年発情期の犯罪者面にまともな名前を名づけられるはずがありません」

「泣いてもいいはずだ。これは俺、泣いてもいいはずだ……………」

がっくりと肩を落とす俺の頭を撫でつつ歌音は、

「い、一応聞いてみようよ、朝浦君が一生懸命考えてくれたのかも shouldn't しないしっ」

焦つたようにフォローを入れた。それにしゅしゅといった感じでミュは頷き、スイは何故かふんぞり返っていた。

「天崎はそのままミュ、黒崎はスイ。なんかでどうだ？」

その言葉に天使と悪魔は硬直し、逆に歌音は頭の上に疑問符を浮かべていた。

「なるほど、朝浦さんも猿並みには知能が回るそうですね。それがいいでしょう」

「ナイスアイディアじゃん！ ……じゃなくって、仕方ねえな！」

「素直に褒められんのか！？ それにお前は話すことを決めてから口に出せや！ もう滅茶苦茶だぞ」

「ねーねー、なんで優美ちゃんが『スイ』なのかなー？」

次はこちらが硬直する番だった。

「なんで？ なんでってそれは……本当の名前だから、ってこれは答えにならないし。盲点だったっ！」

どどどど、どうすればっ！

「そ、それはアタシが水が好きだからだっ！」

「え、そうなの？」

「そんなんだ！　いつもご飯の時にはお水飲んでるでしょ？」

そう言えばスイは何かと水を飲みたがる。お茶は何か濁っていつて嫌なのだという。というか、それはお茶の全てを否定していないか？　まあ、そんなことで水が好きらしい。前に透明度がどうか言っていたが忘れた。

「そーだったね。でも、なんで朝浦君が知ってるの……？」

第二波の攻撃が飛んできたとき、ちょうどチャイムが鳴った。

「よ、よし、歌音。授業が始まるぞ、用意しないと！」

「そうですね。ここばかりは菌類さんに従っておきましょう。あ

と、スイ。ないすでした」

「え、え！　私よかった！？　良かったのかあ………って違う！？」

違うじゃねえよ……と突っ込む前に担任がクラスに入ってきた。

全て、計画通りっ！ではないが、とりあえずは誤魔化せたのでよしとしよう。

それにしても、スイも役に立つ時があったな……いつもバカにしていたが、今日は助かったぞ。

そして俺は歌音にばれないようにそっと汗を拭うのだった。

9 話：知りたがり（前書き）

テスト終わりましたぐ（。？）
更新率も上昇すると思うので、問題はないと思います。

9 話：知りたがり

昼休みを知らせるチャイムが鳴り、午前の授業は終わりを告げた。今日もといふかなんというか、ギリギリ分かる範囲内で授業についていっていたのだが、やはり凡人の俺では理解力に欠けるといことが分かった。

いや、いつもそう思うのだが、改めて実感したというところが大きいだろう。

「ふあー、やっぱり数学は難しいよね。朝浦君は今日のところ分かった？」

前の席の歌音が振り返ってそう訊いてくる。

「いや、正直ギリギリってところかな。これはテストが酷いことになりそうだ……」

「えー、今からそんなこと言わないでよう。私も不安になっちゃうよ」

歌音も相当苦戦しているようだった。

その点、ミュは授業中に当てられた問題をスラスラ解いていて、教師すらも少し驚かせていた。

流石は天使。やはり天使と言うものは頭が良いものなのだろうか、それともミュが特別なのか。

そう言えば、ミュやスイの同属の話聞いたことが無い。

俺が知っているのはあのやたら適当な神様だけだし。それから推測するに、ろくな奴がいまいような気がしてならないのだが、そこはどうしようもない。

そんなことを考えていると、またもや俺のクラスに来客があった。

今朝も訪れた、隣のクラスの学級委員長だ。つまり芹川結穂と言うことになるのだが。

「朝浦陽助！」

「はいっ！　なんでしよう!？」

今朝の状態が全く嘘だったかのような気迫で、俺の元へと近づいてくる。

何やら覚悟を決めたような顔をしている。ほんの少し、頬が赤いのはどうしたのだろうか。気合の入れ過ぎで頬を叩きすぎたとか？

「こ、この間のお礼、を、受け取ってくれっ！」

どんっ、と俺の机の上に置かれたのは何やら箱型の物体。

「何だこれ、爆発物？」

「んなわなけないでしょ！ お礼だって言ってるの！」

「おっ？ 結穂ちゃん。ついに決心したのかな？」

歌音がいつの間にもやら芹川の隣に立っており、肘で芹川のことを突いている。

俺はその箱型の物体の、上蓋をとってみた。

するとそこには。

「お、おお……」

程よく詰められた白米が箱の半分を制圧し、その中央には赤い梅干しが乗っている。もう半分の領地には、タコさんウィンナー、唐揚げやプチトマトと言った定番の兵隊がそこに鎮座していた。

要するにこれは。

「弁当？」

「そ、そうよ。昨日のお礼にお弁当を作ってきたの、お礼によ！」

「なんで二回も言うんだよ……。でもこれ、本当にもらっていいのか？」

「お礼だって言ってるでしょ」

「そ、そうか。じゃあありがたくもらうよ。今日の昼はパンの予定だったからな。助かったよ」

「……………」

「……………」

ニヤニヤしている歌音はいいとして、何故芹川はまだここに居るのだろうか？

別に俺の食べるところを見ていたって面白いことなんか一つもない

はずだけどな。

「本当に鈍感野郎ですね、あなたは。早く死んだ方がよいのでは？」

「ちよつと待てお前。何故に俺はそんな暴言を吐かれなければならぬんだ……」

いつの間にか俺の席の近くにやってきていたミユがそんなことを言い出した。

スイは絶賛睡眠中である。

とりあえず、腹も減っているし頂いた弁当を食べよう。まずはおからずから一口。

「……うまいな」

「べ、別に普通でしょ……」

そこで俺はようやくミュの言っていたことが分かった。そういうことか。

「ありがとな、芹川。　　すごく美味しいよ」

「~~~~~!」

感謝の意を伝えると、彼女は何故かすごい勢いで走り去っていつてしまった。

飯を、取りに言ったのだろうか？

そこで歌音が。

「ふっふーん。大成功だね！　あ、そうだ、朝浦君。その弁当箱は私が返しておくから、食べ終わったら私に渡してね？」

「え、なんでだ？　芹川と一緒に飯食わないのか？」

「ん？　何言ってるの朝浦君。　もしかしてマジボケ？」

「何が？」

「え………？」

そのとき何故だか歌音はムンクの叫びのような顔に変化した。

「おあつ、お前！　何なんだその顔は！」

「あーさーうーらーくーんーはー、マジでした。がっくし」

「意味が分からんわ！」

そんな中、ミユはまたもや俺のことを蔑んだ目で見ていた。

午後の授業はあっという間に終わってしまい、教室はすでに放課後モードで部活に行く者や残っておしゃべりを始める者などで溢れかえっていた。

俺と言えば、どちらでもなくいつものように残ってはいるが自分の席に座ったままでいるという放心タイムになっていた。

理由は前に説明したとおり。しかし、今日はアイツらに聞きたいことがあった。

天使と悪魔が俺の家に住み着いてからかれこれ2週間は経った。それなりにクラスに馴染み、歌音とは特に仲良くなっている。それは良いことだ、風呂掃除の手順も覚えたし朝浦家ルール（陽助発布）も徐々に適用されて言っている。

だが、肝心のここに来た理由が明確になっていない。

というか、修行のために来たとか言ってたよな？ アイツら何か修行してるのか？

人間と触れ合うことが目的だとか言っていたけど、本当にそんなもんでいいのか？

なんというか、詳しいことをもつと教えてほしい気がする。終わりはあるのか、とかな。

共同生活が始まって俺も疲れているのかもしれない。なんだか早く解放されたいような気分だったのだ。

そんなことを考えていても仕方がないのだ、なんだかんだで付き合いあっていくしかないような気がした。だって神様直々に頼まれたからな、あの超適当な神様にな……。

「やべ、なんか頭痛くなってきた……」

あの天界（？）での出来事を思い出すと頭が痛くなってくる。

神

がアレでいいのか……。

そういえば、ミュヤスイは人間界のことをちよいちよい質問してくるが、俺はイツらの世界のこととか知らないんだが。

特に知っていてプラスになることはないだろうが、マイナスにはならないだろう。

というか、俺自身が少し興味がある。

ふと、窓の外を見るとグラウンドで陸上部が活動していた。

歌音はどうしているだろうか。

その姿を探して目を走らせていると……いた、ハードルを運んでいる。

楽しそうに部活仲間と話をして笑っていた。

それはなんだか平和で、日常を思わせるのに十分な見本だった。

「がんばってるなあ……」

気が付くと、教室には誰もいなくなっていた。

夕暮れの光が差す放課後の教室、なんだか神秘的な空間に紛れ込んだようだった。

鞆を持って立ち上がると、教室の出口に一人の女生徒が立っていた。始めて見る顔だったので、同じクラスの人ではないと簡単に分かった。少しウエーブがかかった髪をしているその女生徒とがっつりと目が合い、気まずい雰囲気は漂う。

「え、と……」

俺が口ごもっていると、彼女はその強気な目の中に柔らかな光を灯してふつと笑い、踵を返してそのまま行ってしまった。

同学年のはずが、なんだか大人の雰囲気をもった女の子だった。もちろん名前は知らないし、会ったこともないはずだった。だけれども何か引つかかった。

上手く歯車の合わない感覚。そんなものが俺の心の中にはあった。

家に帰ると、居間では珍しくスイが勉強していた。隣ではミュが同じように勉強していたがその差は歴然だった。何よりも姿勢が違った。ミュはいつも通りシャツと背を伸ばしてイスに座り勉強しているのに対して、スイは机に肘を着きながらあれこれと唸り、頭から煙を立ち昇らせていた。

なんだか出来る子と出来ない子の例がそこに並べられているように見ているこちらが鬱な気分になりそうだった。

たまにスイはミュの方に視線を走らせているが、ミュはその視線に対応することなく手を動かしている。

「なんだお前ら、勉強してたのか」

「おかえりなさいませ、低知能さん。テスト前の勉強ですよ」

「お、おかえりい……私はもう死にそうだよお……ぐすん」

いつも通りの毒舌というか蔑みに加えて今日はスイが性格を取り繕おうともせず頂垂れていた。

今朝、歌音との会話にも出てきたが、もうすぐテストなのだ。

テストの度に学年の番数が発表されるのだが、凡人である俺はいつも中間辺りをうろろしている。

歌音は前に話した通りに賢い。それなりに順位の方は高いのだろう。いつら天使と悪魔は……まあ、なんか見た感じで分かる。

ミュはおそらく上位層、普段の授業と家に帰ってからの勉強の度合いでこんな俺でも大体予想はつく。

対してスイは、まあ……下位層だろう。

悲しいがこれが現実と言うものである。

「あ、そうだった。お前たちに聞きたいことがあったんだよな。主にお前たちのことについてんだけど」

鞆を自分の部屋に放り、ソファーに腰をかけながらそう言うと案の定予想していた応答が返ってきた。

「プライバシー侵害ですね」

「その答え方は予想済みだったんだが……。そういうことじゃないんだよ！」

「天使のこととか悪魔について聞きたいのですね」

「分かってたんなら面倒な言い回しするなよ……」

「か……陽助様……いいえ、下等生物様が予想していたことを私は予想していたということがここで分かりますね。流石は単細胞です、流れが読みやすい」

「え、え、なんでこの会話の中だけで俺がこんなに蔑まれているわけ！？ あとミユ、お前なんか怒ってないか？」

「いえ、いつも通りかと」

「いやね、いつも通りなんだけどもさ、なんか違うってというか……。もうこれがいつもどおりって言える俺はもうヤバいと思う。」

「アタシたちの世界の話？ ふっふーん。教えてあげようか？」

「スイがこちらを向いて反応する。先ほどの勉強に弱った様子とは打って変わってなんだか得意気である。」

さて、スイに国語力があつたかどうかが問題なんだけどな。

「して、なんでそんなことを急に言いだしたのですか？」

「そりゃあ、俺はお前らのことあんまり知らないしさ、一応これからも一緒に居るわけで、少しでも知れたらそれでまた何か分かるようになるってどうか……。いや、とりあえずは俺の興味かな」

「恰好をつけようとしたけれども最終的に投げたパターンですね」

「うっさいわ、ほっとけ！」

「教えてほしいのですか？」

「ああ」

「だが断る。………と言いたるところですがいいでしょう。ジジイ………いえ、神様より聞かれたらなるべく応えるようにと言われておりますので」

「神にも容赦ないお前すげえわ」

「どついたしまして」

ほめているわけでは無いんだけどな。

調子を狂わせられっぱなしの俺に対して、ミユは淡々と語りだした。

世界のじやう、自分について。

10話：表情について

人間の感性からすれば、天使と悪魔が共存しているということはあり得ないという風に受け止められる。

相対してその二種族は仲が悪いのだと勝手な想像で盛り上がったている。確かに、実在していることを知らない人間がほとんどなのだからそれは仕方のないことだろう。

ただ、天使と悪魔と言うのは、仲が悪いわけではないらしい。一部の天使と一部の悪魔がいがみ合っているだけで、特に垣根は存在しないらしい。ここで問題だったのは、一部の悪魔というのが悪魔の上位種だったということである。力で下位種を動かし、一時は天使の住む天界と悪魔の棲む地獄との大きな大戦となったのだそうだがそれを抑えたのが今の神様。あんな適当な感じなのに実は強かったという話だ。

のちに、大戦を巻き起こした一部の悪魔は封印されて、神様によって天界と地獄は統一。二種族の垣根を無くして天使と悪魔は共存することとなった。

そこで、主はあの神様となり今は平和に過ごしている。ということらしい。

ミュの話は要約すればこんな感じだった。

質問するたびに毒を投げかけられたりはしたが、それはまあいいだろう。

「と、まあこんな感じだと思います。お分かりになりましたか？」

「大体分かった。たださ、人間界に修業に来るのはなんでなんだ？」

「それはアタシが説明してやるぜ！」

意気揚々と椅子の上に立ち上がったスイはない胸をそらして高々と笑い声を上げた。

「『人の心を知り、今後の天使・悪魔としての生き方の糧となるようにする』！それがアタシ達に課せられた修行なんだぜ。だからとりあえずは学校へ行っておけて話だ」

「なんか、ありきたりと言うか内容の薄い修行だな。しかも終わりが見えなさそうだぞそれ、大丈夫か」

「何言ってるんだよ、そのためにお前がいるんじゃないか！　ってことで………これからもよろしくお願いしますう………」

「いや、いきなり真面目になってどうするの！？　お前はマジでキヤラ作りが下手だな………」

「へっ！？　ああああ、悪魔が真面目なわけねーだろ！」

「もう滅茶苦茶だな」

「ちなみに、お馬鹿なスイが一度も脱線することなく、噛むことなく説明が出来たのはここに来る前に散々叩きこまれたからと説明しておきましょうか」

「みみみ、ミュちゃん。なんでそんなこというのお」

スイが泣き顔になってそんなことを言う。もはや悪魔失格だと思っ。それにしても、やはり天使と悪魔は仲が悪いわけではないのか。

ミュとスイを見ていると分かるが、あいつらは仲がいい。あまり一対一で話しているところを見るわけではないが、部屋も一緒に文句は言わないし、こうやって絡んだりもしている。

俺の中で、やっぱり天使や悪魔に対する考え方が変わって来ている。これも、なんだか人間と同じことを言える気がした。見た目や偏見でものを言っってはならないというのはこういうことなのかもしれない。

「で、気が済みましたか？」

「あ、ああ……。よく分かったよ。でも、本当に学校へ行くだけでいいのか？」

「それしか今のところは言い渡されていません。あのジジイも明確に課題をくださればいいんですけど」

「あ、もう取り繕うこともしないんだ………」

「何のことですか？」

「いや、いい」

やはりこいつは危ない。

人の心を疲弊させ、潰す力を持っている。これはこれは危険な力だ。

「そう言えばさ、お前たちってなんか特殊な力とかあんの？」

そう俺が聞いた瞬間、何故か食卓は凍りついた。

ミユは目を閉じ、スイはおろおろし始め、音が消えた。

「な、なんだよ……」

「陽助様、プライベートってご存知ですか？」

「そ、れは知ってるけど」

「ならば、そういうことにしておいてください。でなければ『しますよ？』」

「ひいっ!？」

なんか知らんけど脅されたぞ!? 何がそんなに気に障ったんだ? ま、まあこの話はやめておこう。

「なんですかその顔は、早くしまってください」

「顔はしまえるもんじゃねーよ!」

「大丈夫ですか? 顔が赤くなってますよ?」

「いや、お前が変な突っ込みさせるからだろうが……」

「気持ち悪いところはありますか? はっ……。すみません、全部でしたね……」

「え、ちよ、なんでお前はそんな暴言はいてくんの!？」

「違うよミユちゃん! 陽助さんは……カッコイイよ!」

「え?」

「え?」

「あっ」

食卓が静まりかえった。

俺は口を開けたまま固まり、ミユは石造

のごとく微動だにせず、スイは目を白黒させていた。

「め、飯にしようか」

「そうしましょう」

「う、うん」

なんだか、ぎくしゃくし始めた。

と、そんなことも夕食を取り終わると忘れしまったのか、それともそれどころじゃないのか皆勉強に打ち込み始めた。普段なら一週間前から始めるとか一夜漬けにするとかテストの前はそんな感じだったのだが、こいつらが勉強をしていると、なんだかこちらも勉強しなければならぬ気がしてノートを開いていた。居間に三人、机に座ってカリカリと勉強中である。

だけれどもどうだろうか、ミユは背筋を伸ばしたまますっかりと手を動かしているがスイは決まっとうーとかあーとか泣き声を上げながら教科書とにらみ合いをしている。

俺は途中からだんだんと飽きてきて、目的は天使と悪魔の観察にシフトしてしまっていた。

チラリ、とミユのノートを見てみるととても綺麗にまとめられている参考書として販売してもいいんじゃないかと思えるくらいのものであった。

その視線に気付いたのか、ミユは顔を上げこちらを見て。

「何ですか、私の指を見ていたんですか？ 指ふえちでしたんですか？」

「なんでそうなるんだよっ！？ お前のノートを見てたんだよ。すっげえ綺麗にまとめてあるな……」

「天才ですからしかたないですね」

「謙遜とかしろよ……。まあいいか。ところでスイ、お前は大丈夫なのか」

スイの方へと視線を向けると、やはり机に突っ伏したままでうめき声をあげていた。

「大丈夫、……に見えるう？ 駄目だよお」

「だよな……」

どうやらスイは俺と同レベルの位置にいるらしい。いや、もしかしたら俺より下かもしれないが。

しかし、これはやはりよくない。当然のようにミュが頭がよく、俺とスイは罵倒されるレベルの馬鹿であるという展開は御免だった。だからと言って、勉強したところで俺の成績はたかが知れている。学生の本分は勉強である。

………だからどうした、って話になるよな。

結果、諦めた。

次の日の朝、いつも通りに時間帯をずらしての登校。俺が学校について数分後、ミュとスイが登校してくるのである。

今日もどうやら登校途中に歌音と合流したらしい。機嫌のいい歌音が俺の前の席に座る。

「今日もご機嫌だな」

「そうだねー。お友達と一緒に楽しく会話しながら登校できたからだよ。だんだん仲良しになっていくっていいことだよな！ 朝浦君もそう思うよねっ！」

「ああ、そうだな」

昨日よりも若干テンションの高い歌音だった。

そこでふと廊下に目をやると、この間の女子生徒がこちらを見ていた。

少しウェーブのかかった髪に強気な目、出会うと不思議な感覚に見舞われる少女。

「朝浦君？ どうしたの、ぼーっとして」

ハッ、と我に返ると歌音が自分の椅子の背もたれに前向きで寄りかかり、こちらを見ていた。

歌音ならあの子が誰なのか知っているかもしれないと、訊いてみることにした。

「なあ、歌音。あの廊下に居る子なんだけどさ、誰か知ってる？」

「廊下に居る子？」

歌音が廊下を見据える。しかし、先ほどの彼女はもうすでにそこにはいなかった。

「誰もいないよ？」

「あ、あれ？ さっきまで廊下に居たのに……」

この間もそうだった。神出鬼没……とはまた違うのだろうか、いつの間にか現れては次の瞬間には消えているのだ。もちろん、追ったわけではないので、ただここから見えない位置に移動しただけなのかもしれないが、天使と悪魔が俺の家に居るわけだから、無駄に敏感になってしまっている。

「どんな子だったの？」

歌音が訪ねてくる。

「えっと、こう……ウェーブのかかった髪をしていてさ

一通り彼女の容姿や特徴、雰囲気伝えた。しかし歌音は頭を傾げて、

「うーん、ごめんね。私は知らないや。今日の部活の時にでも他のクラスの子に聞いておくよ。……で、朝浦君。どうしたのかな、その子が気になるのかな？」

「そうだな……って！ 別にそういう意味の気になるとかじゃなくってだな！」

「きゃーっ。ついに朝浦君も女の子に興味を持ち始めたのかなっ！

？」

「なんかその言い方は語弊を招くから止めろっ」

そんなとき、遠くで声が聞こえた。

「……朝浦様は男にしか興味が無かった時期があった、と」

「おい、てめっ、ミュ！ 変なことを言うな！」

俺がそうだった瞬間、クラス的女子軍から反撃を受ける。

「朝浦君！ そんな怖い顔でミュちゃんに怒らないでよ！ 驚いているでしょ？」

どう見たって無表情そのものですけど！？

「朝浦君！ また暴言吐いてるの？ 暴力は顔だけにしてよね！」

え、何これ、ミュの毒舌が伝染でもしてんのか！？

「朝浦君！ まだミュちゃんに『様』付けで呼ばせてるの？ いい加減止めようよ！」

いや違うそれはあいつが勝手に……。

「ちよ、ちよっとみんな、落ち着こうよ。朝浦君はミュちゃんに怒っているわけじゃないんだよ。顔だって怖いけどこれがデフォルトなの！ 様付けは、ミュちゃんが面白いからって。……顔が怖いからって人のすることを全部悪い方向にもって行っちゃだめだよ、顔が悪いからって！」

「歌音、それフォローじゃないし……」

「あわわ……。朝浦君がしぼんでいく……！？」

朝から精神的ダメージで俺の体力はゴリゴリと削られていった。

目から一滴のしずくが落ちたのは内緒である。

11話：対策と傾向、油断

今日は珍しく俺、歌音、ミユ、スイの四人で帰路についていた。夕焼け色に染まる住宅街はいつもとは違った一面を見せ、風景画として成り立つほどの神秘さを兼ね備えていた。

そこに仲良く並んで歩く四人の姿。

歌音は四人そろって帰るのがそんなにもうれいいのかご機嫌で、ミユは俺の踵を踏むという地味な悪戯を実行中、スイは腹が減ったと目を棒線のようにして空を仰いでいた。

そんな何気ない下校途中に、不審な影が物陰から現れた。

いや、現れたという表現はこの際どうなのだろうか。何もなかった空間から突如現れた、そう思わせるほどに奇怪な登場だった。

「ねえ、君たち。んゝ、正確に言つとそこの黒髪ロングの少女が目当てかな？」

並んで歩く俺達の前に男が立ちはだかったのだった。

その男はスイの特徴を挙げ、にやにやと気味の悪い笑みを浮かべていた。

黒いコートに身を包み、サングラスを着用。髪は黒のオールバックで、乱れは見当たらなかった。

年齢は俺達より確実に年上。ただ、青年ともいえるが、雰囲気があるで違う。

良くないオーラというか、雰囲気というかそんなものがヒシヒシと伝わってくる。

「な、なんだよっ。アタシになんか用なのか!？」

指差されたスイも驚いた様子だった。ただのナンパにしては手口が少々雑な気がする。

「もしかしてロリコンの方ですか？ 良かったですね、朝浦さん。仲間が増えましたよ?」

「俺はロリコンじゃねえわ!」

「ちょ、ちよつと朝浦君、あの人なんかおかしいよ」

いつも通りのミュとスイに対して歌音は少し怯えていた。俺だってそうだった。

こんなわけのわからないことに巻き込まれるなんてことは小学校の時以来だったからだ。

まあ、その時は目つきがどうこうとかで上級生に絡まれただけだったが。

「とりあえずさあ、後の人はいらさないからさ、どこか行ってくれない？」

「お前、意味分かんないこと言ってるなよ。俺たちは今から帰るとこだ。邪魔すんな」

小学校の時に切り抜けた技術。自分の欠点を最大限に生かした脅し。とりあえずは乱暴な言葉遣いでそして目つきで相手を退かせるものなのだが。

「人のソレじゃあ何とも感じないよ。もっとこう、暴力的にね？」

まあ、言っても分かんないか」

その時、ミュの顔つきが少し変わったのが俺には分かった。

それと同時にミュは俺に指示を飛ばした。

「朝浦さん。歌音さんを連れてとりあえずは離れてください。何も質問せずに速やかに言うことを聞かないと爪を全部剥ぎます」

そんな切羽詰まったミュの言葉に対し、男が放った言葉は別の回答だった。

「いやいや、ここでは何もする気はないよ？ 一般人の目があるからね。いざとなれば勝手にそっちが記憶操作してくれるとは思うけど……面倒だしね。その内また会いにくるよ。スイィティシフォネ」
その後には男はスイのことをもう一度指差し、そのまま背を向けて行ってしまった。

俺には突発的すぎて、何が起こったのかが理解できなかった。

それから家に帰るまで暗い雰囲気が出た。四人を取り囲み、歌音は頑張つて盛り上げようとしてくれたのだが、スイはずっと俯いていて、ミユはどこか遠くを眺めていて全くと言っていいほど効果がなかった。途中で歌音とは別れ、俺たちは帰路についていたがそこでミユが突然口を開いた。

「先ほどのあの男、人間ではありませんね」

それは俺に放った言葉ではなく、スイに対してのものだった。

「そう……だね。あの人は……違うね」

スイの返事はいつものようなハキハキとした活発さが無かった。

テンションもいつもより三段階ほどダウンしているし、一体何事だったのだろうか。

俺には何が起きているのかよくわからないので、あまり口を挟まないようにしているのだが、すごく気になる。

「あの人は、私とおんなじ悪魔だよ。階級は私より上、大きな力が感じられたもん」

ぼそ、ぼそ、と言葉を吐き出していくスイ。ミユはそれを黙って聞いていた。

「スイ……ティシフォネっていうのは、私の真名。えっと、真名っていうのは本当の名前って意味だよ」

「ティシフォネ……なるほど。そういうことでしたか。では、狙いがあなたと言うことは」

「そう、あの大战で負けた悪魔族の意思を継いだ人だと思う……」話が転々としている中、俺の頭の中はごちゃごちゃになっていた。仕方なく今日の夕飯を何にしようかなどと考えていると、ミユがこちらを振り返ってきた。

「何を現実逃避しようとしているのですか、生ゴ……陽助様。あなたにとっても無関係な話ではありませんよ？」

「もう注意しても治らんだろうな……って待て、なんで俺にも関係あるんだよ!？」

「それはそうでしょう? あなたは私たちを神様から任された存在

なんですよ？ どうして無関係なのですか？ そのところを詳しく説明できるのならお願いします。まあ、朝浦様程度の知能では小学生相手にも論破できるかどうか怪しいところですけどね、ふっ」「こいつ笑いやがったよ！ 無表情で人を小馬鹿にして笑いやがったよ！」

「ちょ、ちよつとお……二人とも喧嘩は駄目だよ……うっ」
キャラを作ることすら忘れて俺たちをなだめるスイ。これは重傷だと悟らざるを得なかった。

ミュは無表情でスイの横顔をただ眺めていた。

「と、とりあえず、家に帰って作戦会議だ！ よし、帰るぞ。走って帰るぞ！」

言われてしまつては仕方がない。それに、スイの困ったような顔をいつまでも見ていたくはなかった。

俺が走りだすと、続いてミュがついてきた。

「あわわっ。ま、待ってよう！」

スイも混乱はしていたが、一応ついてきてくれた。このままマンシヨンのエントランスまで走り抜こう。

嫌なことを今は忘れてさっぱり出来るように。

何か大切なことを考えるときは、一度頭を空っぽにした方がいいのだ。

だから、家に帰って落ち付いてからもう一度考え直そう。これからの対策を。

正直何が起こっているのかミュとスイが何について話していたのかは分からない。

でも、俺にだってできることはあるはずだった。

何かと問われても答えることはできないけど、何かがあるはずだった。

だって俺は、神に天使と悪魔の世話を任されたんだろう？

「陽助様はいつも頭が空っぽですけどね」

「人の心の中を読むな!？」

夕飯が終わり、皆が机に再びついたところを見計らって俺から本題を切り出した。

「えっと、今、何が起きてんのか詳しく教えてくれないか？」

ミュに言うとか何か言われそうなので、スイの方を見てそう訊いてみた。

「……多分。多分だけど、あの人は私のことを狙ってる。地獄に連れて帰って何かしらの行動を起こすと思う……」

「狙ってる？ スイってそんなにすごい奴だったのか？」

地獄の、しかもスイより階級が高いらしい悪魔がスイのことを重宝しているかのような口ぶりに俺は驚いた。

しかし、スイは。

「ううん。私はすごくくないよ」

「……？ どういう意味だ？」

「……」

そこでスイは黙ってしまった。

リビングには沈黙が訪れる。ミュも全く口をはさんでこなかったし、これはいよいよ切羽詰まってきたのかもしれない。

「さて、今日のお風呂当番は誰でしたでしょうか？」

幾つか時が流れた後、ミュが突然そんな事を言い出した。

「ちよつ、おまつ、……空気読めよ」

「空気を読むのはKY陽助様の方です。今ここで何を考えようと事態は変わりません。分かったことをまとめて理解しておく、それで十分です。後は普段通りに過ごしましょう、それが一番だとは思いませんか？」

確かに、ミュの言うとおりかもしれない。

今ここで不安な気持ちを増大させようと、何が起るかは分からないし、現状は変わらない。ならばいっそ逆に受け止めてしまえばい

いのだ。

何が起きるかも………
もしれないのか、という予想を立てていればいい。
それこそ不測の事態に備えて。

「それに、いざとなったら陽助様がいます。……………超
頼りないですけどね」

「何だそれは!？」

「冗談です。スイ、心配しなくても私たちがいます。何が起ころう
と、心配はいりませんよ」

「ミュちゃん……………陽助さん……………」

スイは少し安心したのか、目を潤ませて俺たちのことを見上げてい
た。

なんだかんだで俺が出来ることはなさそうだが、がんばってみよう。

「それにしてもミュ。お前も気のきいたことが言えるんだな」

「何を言っているのですか？ 私はいつも心配りしていますが、陽
助様以外限定で」

「何故俺は差別されているっ!？」

「差別ではありません、区別です。……………というのも決まり文句にな
ってきたのであえて言いましょう、差別です」

「だからなんでだっ!？」

「ふふふっ、あはははははっ……………」

気が付くと、スイが先ほどまでの辛気臭い顔とは一転して、笑って
いた。

やはり、いつも通りである方がいいのか。

流石ミュだな。きっとこの芝居もスイのことを気遣って……………。

「私は嘘など吐きませんので」

どつゆっとなの……………。

12話：残像視界

何事もなく次の日を迎えられた。

昨日のミュが言っていたように、そんなに心配することもなかったのかもしれない。

カーテンの隙間から刺す朝日によって半強制的に目を覚まされる。ふと気がつく、いつものミュの暴力&毒舌の目覚まし時計が作動していなかった。

時間は6時半、いつもならこの時間帯まで寝ていると鳩尾に肘を入られるのだが……それが無い。

何か物足りないような感覚を頭から追い出し、リビングに向かう。そこには誰もいなかった。

寝ぼけ眼を擦ってみても視界が一転することはない、誰もいないのだ。

ミュも、スイも。いつもは流れているはずニュースも入っていない。テレビの電源がついていないからだ。ミュは人間界のことを知ることが出来るとニュースは毎日欠かさず見ている。スイは占いのコーナーを朝の楽しみにしていてもテレビの前に陣取っているはずなのに、居ない。

「おい、……嘘だろ？」

慌ててミュとスイの部屋の前まで行く。ドアを叩く。

「寝てんのか、おい。朝だぞ！ ……いないのか？ 本当に居ないのか？」

ドアノブに手を触れる。開けて本当に居なかったら、そう思うと不安で仕方がない。

昨日出会った不審な男の台詞から読み取れる意味。スイが言った、私を狙っているという言葉。

もし、このドアを開けるとミュとスイがいて、実は俺はまたミュに騙されていて。

意地悪くミユが毒を吐いてくれるならそれはそれでいい。スイが涙目になりながら俺を変態と呼ぶのならそれでもいい。

この嫌な予感を早く振り払いたかった。

勢いよくドアを開けると、そこには綺麗に折りたたまれた布団。それと、ミユが立ちつくしていた。

不安の中に安堵が甦るが、それも束の間だった。何か様子がおかしい。

羽根が、黒い色をした羽根が部屋に散乱している。的確に場所を言うと、寝る際にスイの布団が敷かれているその場所を中心として円を描いて、だ。

「ミユ。何だ、居たのか……。スイは？」

何かごちゃごちゃした気持ちを押しこむようにしてようやく声を出せた。

必要最小限のことしか話せない。これ以上声を出そうとすると、叫び声が溢れそうだったから。

「やられました……。おそらく、昨日の夜でしょう……。空間転移によってスイが連れ去られました。この羽根は抵抗した際に抜け落ちたものだ」と

ミユは普段より少し低いトーンでそう言った。

いや、実際はいつもと声は変わっていないのかもしれないが、俺にはそう聞こえた。

「連れ去られた……。？　もしかして昨日帰り道の男に！？」

「……。ええ。しかし場所は割れています。先ほど感知しました、今から私はそこへ行ってきます」

そう言ってミユは神秘的に光る二枚の羽を広げた。白い天使の羽である。

見るのは二度目だが、明らかに最初に見た時より輝いているように見える。

「待ってくれ、俺も行く」

恐怖心を押えてそう言う。

「何を言っているんですか」

そこにミュの冷たい言葉が返ってくる。

「人間が悪魔に対して何が出来るのですか、昨日もそうだったでしょう。ここは私が行きますから陽助様は普段通り学校へ行ってください」

そんな言葉に、俺は恐怖を忘れて少しの怒りをおぼえた。

「何言ってるんだよ！ そんな俺だけが無関係って顔して普段通り過ごしてられっかよ！」

「そうじゃないんです。何も出来ないからついてくるな、と言っているんです。それに、これも修行の一環と考えれば大したことはありません」

そう言っただけミュは窓のさんに足をかける。

どうしても俺を連れていく気は無いらしい。しかし、俺は納得できなかった。

理解はできる。俺はただの人間だから、悪魔に対して何もできることはない。

納得はできない。ただの人間だから、この問題は気にせず普段通りでいると。

神様から直々に言い渡されたこの『二人をあずかれ』という命令。

その意味はどこまで解釈できて、広がっていくかは分からない。

だけでも、俺はその意味を出来るだけ拡大解釈していきたい。

言うなれば、プライド。

一般人が何を、とそう言われるかもしれない。でも、俺は。

神からの命令のそれを、『二人を見守ってくれ』と、そう捉えたい。おこがましいかもしれないが、俺はそう思った。

ミュやスイは、普段はただの女の子なんだ。学校に通って、勉強して、友達といて、笑って、そうして暮らしている人間と変わらない表情を見せる女の子たちなんだ。

それを男の俺が放っておけるのだろうか。

天使とか悪魔とか人間とかは関係が無い。全てをひっくりかえして、俺

は言っ。

「待て、ミユ。確かに俺は何も出来ないけどさ、見守るってことはできるだろ」

ミユがこちらを振り返る。

何を言いたいのですか？ とそう問うように。

「神から直々に受け取った命令だぜ？ 破れないだろ、そんなもん破ったら天罰が下るんじゃないのか。そんなの俺は嫌だね。だから、俺の身のためを思って言う。連れて行け」
それから少しの沈黙が訪れる。

ミユは考えているようだった。こうしているうちにもスイに危険が迫っているのかもしれないのだが、ミユは考えてくれている。結局、ここでも弱さというものは露呈されてきている。

しかし、退くわけにはいかなかった。

やがてミユはふうっ、と小さく息を吐いて肩をすくめて見せた。

「ウジ虫のくせに何をそんなに格好つけているのやら、恥ずかしすぎてこちらが真っ赤になりそうです」

「なっ、お前っ……!!」

「分かりました、一緒に行きましょう。ただし、絶対に邪魔になるので後ろの方にいてください。前に出てきたら私が蹴り飛ばします」
「お、おっっ!!」

毒舌も気にならないまま、俺はそう返事をしていた。

「やはり、君はすごいよ。もったいない。どうしてそんなところにいるんだい？ 地獄に戻る気はないのか？」

昨日と違い、サングラスを付けていないコートの男は、スイに向かってそう言い放った。

存在から感じられる力の量はすさまじく、スイでは敵わないことは

明白だった。

それなのに男はすばらしいという。スイにその意味は正確に伝わっていた。だからこそ彼女は拒む。

「い、嫌だねっ。 お前なんか知るか！」

「はっはっは……、どうしてそう強情になるのかな。 ティシフォネ」
「その名前で呼ぶなっ！」

ブアアッ、とスイの手から出現した黒い粒子が男に向かって飛ぶ。それを男は片手で粉碎する。

圧倒的力の差。しかし、男はスイを傷つけることはしない。

「もつと見せてくれないか。 君だって解放したいはずだ、徐々に楽になるのもいいかもしれないぞ？」

「そんなこと……」

「ない、と言いつけるのか？ 本当に？」

「……………」

「ほら、素直になるといい。 俺はここで黙って見ているから」
暗いこの場所では人気も少ない。ただ、それだけではスイの心配事は拭えない。

なんとしてでもここからは逃げ出さなければならぬ。

辺りを見回すが、逃げられるとしたら空。天井に大きな穴が空いていてそこからしか出入りできないようになっていて。周りの様子から察するに、ここはどこかの廃墟だろう。

空間転移によってどのくらい飛ばされたのかはわからない。ただ、そんなに遠くまで運ぶほど男は力を使っていないようにも見える。

「う、う、だめ。 駄目だよ……………」

男は黙ってスイを見つめるだけだった。

何も気をそらせるようなものはない。攻撃も男には通じない。

どうすれば、とそう考えていた時、周りを囲んでいた壁の一部が吹き飛び光が差し込んだ。

そこにはミュと陽助の姿があった。

「ええ……………ミュ、お前……………」

「何か問題がありましたでしょうか？」

そんな軽い言葉を交わし合いながら、この廃虚内に入ってくる。しかし、男はそれを許さなかった。

「思っていたより早かったね。ただ、ここには入ってこないでほしい」

黒い球体を生み出し、それをミユと陽助に向かって放出する。

暗黒の電流をまとったそれは、地面に着弾すると、四散して大きな爆発を起こした。

「ミユちゃん！ 陽助さんっ！」

煙で何も見えなくなる中、男の声だけが聞こえてくる。

「姿形も無くなるくらいに粉々になったな。あの天使も人間がいては相殺することは出来ないだろう。さて、スイィティシフォネ。

これで君はどう感じるかな」

消された、ミユと陽助が。

死んでしまった。新しく出来た温かい家族が、日常が。

煙が晴れてその姿が鮮明に映る。そこには大きな縦穴と天使の羽根が数枚落ちていた。

それを目の当たりにしたスイの中で何か切れたような音がした。

回線が切り替わる音、ブレーカーが全て落ちて、視界が暗くなる。

もう何も考えることはできない。

もう何も感じる事が出来ない。

もう、壊すことしかできない。

男はスイが切り替わったのがしつかりと分かった。

感じられる力の量が先ほどのちっぽけなものに比べて爆発的に増大したのが分かった。

知らず知らずのうちに笑いが漏れ、汗を流していた。

要するに男は興奮していた。このすばらしく大きな力に対して。

それが自分のものになると考えただけで震えが止まらない。恐怖の震えではなく幸福の震え。

馬鹿になりそうなほどの力、このイカレた感じがたまらなかった。

「ふはははははは！ 何てことだ、こんなにも予想を上回るとは！」

男は熱でも出たかのように身体が熱くなっていくのを感じていた。

「強大だ、最強だ、最悪だ！ 何とも言い難いこの力、これさえあれば天界なんぞ捻り潰せる。そんなことよりも私が神になることも可能だ！」

それにしても先ほどからスイは動こうとしない。

少し不思議に思い、じっと目を凝らして見てみる。

ブレていた。スイの実像がブレて見えていた。おそらく、力の大きさが男の視界にも作用しているのだろう。

それにしても汗が止まらない、と男は首の辺りや額を拭う。

額の汗を拭った瞬間、おかしいほどの汗が顔を覆った。

「何だ、俺はこんなにも……？」
違う。

何か違和感を感じた。

額を拭った瞬間に、汗の量が以上に増えた。これは何を指しているか。

汗を拭った手を見える。

無い。

手首から上が紛失していた。

「なん、だ、これはあああああっ！」

先ほどから出ていたのは汗ではなかった。血だ。血があふれていたのだ。

反対の手で首元を触る。

一部分が抉りとられていた。

「はっ、ははははっ」

熱は痛み。汗は血。

力の大きさに驚嘆しているうちにとんでもないことが自分の身に起こっていた。

だとすると、先ほど見えたブレるスイの姿は、残像。

「俺は、何てモノを……。こんなものはっ……………」

次の瞬間には左腕が無くなっていた。

「ははっ、ははははははははっ！ 流石、流石だよスイ！！ティシフオネ

！ 君は素晴らしい！ ぜひ地獄に招待しよう、私たちの仲間が待

っている、さあ！」

後ろに狂気を感じた。

それは最早一個体から発生させられるはずのない異様な、異質な存在だった。

男は声を出すことが出来ない。

「カ、エツ……………セツ」

呪いを紡いで発したような声で言葉は飛ぶ。

最後に男の瞳に映ったのは血まみれになった少女。

まぎれもなくそれは悪魔だった。

13話：家族（前書き）

すこし遅れてしまいました。すいません！

13話：家族

瞬間、だった。

いや刹那と言うべきだろうか、俺は空にいた。比喻でもなんでもなく、本当に空にいた。

「いきなり失礼な方ですね、粉々になるところでした」

いつも通りの無表情でミュは言う。彼女は今、俺のシャツの首もとを掴んでいた。

「ぐ、苦しい……。ミュ…俺死ぬ」

「またまたご冗談を、陽助様がそんなことで死ぬはずがないでしょう？」

「無理無理っ！息がっ……」

「では、手を離しましょうか？窒息死なら身体は綺麗に残りますが、転落死は……悲惨ですよ？」

どっちにしても殺されるのか……っ

というか、今はこんなことをしている場合ではないのではないだろうか。

スイが大変な目に合っているはずなのだ。

そんな俺の考えを察してか、ミュはいつもより平淡な声で呟いた。

「心配するべきは……私たちがスイに巻き込まれないか、と言うことだと私は考えます。陽助様、見ておいた方が良いと思います。あれが、スイの抱えているものです」

ミュのそんな言葉の後に、断末魔と呼ばれる叫び声が廃墟内にこだましたのが分かった。

それは、スイのものではなく先ほど俺たちに向かって攻撃を放った男のものだった。

空気を裂くような音、おそらく俺は生まれて初めてそんな音を聞いたであろう。

一人の少女が血溜まりの中に座り込んでいるのが見えた。スイだ。

彼女は肩を震わせ、散ったミュの羽根に目が引き付けられている。

「降りましようか」

ミュはただそう言って、俺のシャツの首もとを掴んだまま下降を始めた。

地面まで残り何メートルというところでスイがこちらに気付き、少し顔を輝かせる。しかし、すぐにその笑顔は失われていって、どこか苦しそうな顔になっていった。

何が言いたくて、何を言いたくないのか。今の心の中はようになっていくのか、その複雑な気持ちは俺には理解できるとは思わなかった。想像することは簡単だ。だが、本質までは見えはしない。それにもしかしたらスイ自身、自分がどう思っているのかが分かっていないような気もしたからだ。

無事に着陸し、ミュも俺の横に立つ。

スイは顔を伏せたまま拳を握りしめている。肩を震わせている。

「えーと、何だ。その……………うん……………」

何を言っているのか、分からなかった。

「わ、私は……………、こんな、こんな……………」

嗚咽を漏らしながらスイは呟く。自分の力に対しての、言葉を。

「私は、こんな化物です……………。自分で制御できないほどの力を持って余した、弱い悪魔です……………」

つうつ、と一筋の光がスイの瞳から零れる。彼女はそれを拭うが、手に残るのはただの赤だった。

それを見てまた彼女は続ける。

「私が人間界に来たのは、……………精神の強さ、心の強さを高めるためでした……………。だから、強く在ろうとしました。一般の悪魔のようになろうとしました。でも、でも、駄目でした。自分の力は抑えきれなくて。頭に血が上ると、もう何も考えられなくなって……………。さっきだってそうです。ミュが、あの程度の攻撃を避けられないわけなのに、なのに、私は、勝手に……………」

ぴちゃ、ぴちゃ、と赤が跳ねる。

彼女の綺麗な黒髪は返ったモノを受け、酷く固まっていた。

「暴走、してしまっただんです……。私は自分の力さえも扱うことが出来ないんです。そんな、欠陥品なんです」

「……。帰って風呂入らないと、髪酷いことになってんぞ」

「帰れません……。人間界に来たばかりなのに。こんな、ことして……」

「今日の風呂掃除当番は、変わってやるからさ……」

「駄目です。こんな、危険な欠陥悪魔……。そばに居たら駄目です」

「時間帯的に学校は遅刻だな、朝飯も食ってねえし」

「学校なんて行けません……。無理なんですよ。やっぱり私なんか、修行したって無理なんですよ」

「うるせえよ」

「え……？」

スイの話聞いていて、彼女は何を考えていたのか。そんなことが少しずつ読みとれてきた。

だから俺は、かける言葉を見つけれなかった。かなり、強引なものだが。

「お前は何を言っただ。修行なんていつしたよ、お前のあのキラづくりがそうだって言うんなら全くの問題外だよ」

「そういうことじゃ、無いんですよ。陽助さんは怖くないんですか？ 簡単に人を、悪魔を殺すことのできる力が近くにあるんですよ？」

「しかもそれは制御が効かなくて、危険なんですよ!？」

「怖くないね、誰がスイなんかを怖がんだよ。それにさ、今まで一緒に暮らしてきて……。つってもまだ一カ月も立ってないけどさ、危険なことなんてあったか？ そんなに危険だったか？ お前はビクビクしながら暮らしてたのか？」

「そ、それは……違うけど……」

「じゃあ、問題無いだろ。それに俺はまあ、矛盾しちまうけどさ。

怖くないわけではないよ、でもスイを信じてるから」

「え……？」

そこでやっとスイは、こちらに顔を向けてくれた。

頭からペンキを被ったかのように赤色に塗れた彼女は小動物のように身体を震わせていた。

「スイは本当は強い子なんだろ、そんなことぐらい分かる。克服しようとかわざわざ人間界に来たんだろ。あきらめずに、だ。そんなスイは絶対弱くないと俺は思うんだよ。力とかそういうことじゃなくてな」

「でもっ……私は……」

「でもじゃ

「でもじゃないですね。まったく長々と説教（笑）を垂れ流す陽助様のせいで遅刻は確定ですね」

「ちよ、おい。このタイミングで何を……」

「とりあえず黙っていてください」

いきなり話に割って入ってきたミュは、当たり前のように俺に毒を浴びせつつスイに近寄っていく。

「陽助様も言っていたように、私も信じています。それにいざというときは私も力を使います。それでどうにかなるわけでもありませんが、なんとか抵抗します。その間にあなたは自分で力を抑えてくれればいいんですよ。そう、信じているからこそその作戦です」

ミュが今までにない優しさで、そう、まるで天使のような包容力のある声色でスイを諭す。

そして彼女に触れ、汚れることもかまわずに抱きしめる。

「私たちは『家族』というものらしいですよ。一緒の家に住んで、助けあっていく集団のことを指すそうです。明確にはそうでないかもしれませんが、そんなことはいいいんです。私たちは家族。だから、迷惑かけたっていいんです」

「う、う………ミュちゃああああん！」

ついにスイが決壊した。ミュに抱きつき、大声で泣く。泣く。

ミュはそれをいつもの無表情に一般人には見分けのつかないだろう少しの笑みを混ぜて受け止めていた。

そして俺はと言うと、美味しいところを持って行かれたと言うこと

に今気付くのであった。

「天界に連絡を入れておきました。この場は何とかしてくれるでしょう、私たちは一度自宅に戻りましょう」

一通りスイが泣きおわった後、ミュが唐突にそう言った。心なしかいつもより表情が固く、それでいてどこか焦っているようにも感じられた。

が、それも一瞬のことで瞬きをするとミュはいつもの表情に戻っていた。

普段から無表情なミュの顔は些細な変化を見出すことがとても難しい。だから俺は何かの勘違いだと思ふことにした。

スイのことが片付いて、余計なことを考えなくなかったからかもしれない。

「そうか、じゃあ戻るか。………とりたいところだけど、スイはどう？ すんだその格好」

スイはペンキを頭から被ったかのように全身が赤塗れである。それに先ほどまでは気にしていなかったが、臭いが酷い。かろうじて吐き気をとどめている現状だ。

「うつつぶ……。なんか体調がおかしくなってきた」

「そうですね。この状態だと不審に思われますよね。では」

そういうとミュは手をスイに向かってかざした。するとスイを中心に円が描かれ、円筒状に光の柱が出現する。その光に？ まれたスイは慌てふためいている。

「ふえええっ！ 何なんですかこれ！？」

「じつとしていてください。余計なモノを落としている最中です」
光が完全に消えたころ、その中心には綺麗さっぱりと赤を落としたスイがとんび座りで目を瞬またたいていた。

「す、すごいです！ 洗濯機みたいですよ！」

「その表現はどうかと思いますが……。まあこれで帰れますね。さ、私たちは素早く帰りましょう」

そのミユの物言いに俺は何故か悪寒が走った。そして徐々に嫌な予感と言うものが膨れ上がってくる。

「私たち、は？」

「では、陽助様。地を這ってお帰り下さい。今日中にたどり着ければいいですね」

「え、おい？ ミユ、何を言っているんだ？」

ミユは羽を広げ、スイの手を掴んで上昇する。

え、あれ、これって……。

「おいおい、冗談キツイぜ……。うそでしょ？」

「（ニヤリ）」

「ちよちよ、おかしいって。何の装備もなしで山下れるかあつ！」

男がスイを転移魔法とやらで飛ばしたのは山の中の廃虚だった。それゆえに自宅からこっちに来る時にはミユに運んでもらったのだ。

もちろん、コンクリートの道なんて存在していない。道なき道という表現がぴったりとそのまま当てはまるかのような山道が目の前には広がっている。

俺の絶望を知ってか知らずか、ミユの姿はだんだんと小さくなっていく。

「え、ええー……………」

冗談ではないらしい。

「み、ミユちゃん。陽助さんかわいそうだよ……………」

「いえ、いいんです。ここに来るときに足手まといにはならないようにと言っておきましたから」

「でもそれって、ここに来るまでの話じゃないの？……………、ミユち

やん。なんか怒ってる？」

「いいえ。別に」

ミユの一言は風に流され消えていった。

14話・勉学に励む(前書き)

こんな時間に投稿してすみません！
ギリギリ三日以内です。はい。

14話：勉学に励む

スイの一件が収まった後、また新たな問題が発覚した。

いや、別に命にかかわるような事件だとか天使やら悪魔やらが関わっているわけではない。

一言で言うなら、学生には定期的に訪れる事件。いや、事件と言うよりかは壁。

まあ、定期テストのことなんだけどな。

この間の一日、結局学校はサボることとなった。それが響いたのか、テスト前の追いこみ押し込み授業が受けられずに有力な情報（出題傾向）が得られなかったのだ。

その日に限って歌音も休んでいたらしく、友達の居ない俺には頼れる相手がいなかったのだ。

しかし、歌音がこれではいけない！ と知り合い関係を当たり、勉強会を開いてくれることになったのだ。

で、今は学校の図書室絶賛勉強中……なのだが。

「え、えええ。虚数って何？」

「そう言えば天使の中には虚数を応用して術を使う者もいたと聞いたことがありますか」

「何なに？ 天使ってなんの話かな？ ミユちゃん」

「お前らちよつと黙ってるよ……。後、余計なことは……」

「ちよ、ちよつと！ 図書室では静かにしなさいよ！」

スイ、ミユ、歌音、俺、芹川の5人が図書室の一つの机を占領し勉強会（？）を開いていた。

歌音は友達関係からノートのコピーなどを持ち寄ってくれた。芹川は違うクラスだがテストは全クラス共通なので、問題はない。

だがしかし、この状況はどうだろうか。

レベルの高い女子4人の中に一人男の俺。周りからはヒソヒソと陰口が聞こえてくる。

はーれむ状態だわー、とか朝浦王国が形成されているわー、とかそんな感じの。

一部の男子勢からは刺さるような視線が。怖がられるよりいい、と考える俺はおかしいのだろうか。

「うーん……もうアタシは寝る！」

「寝ると朝浦様のようになってしまいますよ？」

「それはどういう意味だよ……」

「あっ、結穂ちゃん。ここ教えてー」

「えっとそこはね。ここの」

真面目に勉強しているのは仲良し二人組。不真面目なのは天使と悪魔の二人組。

これ、勉強になっているのか？

勉強会は絶対に捗らない、とどこかで聞いたことがあるのだがその通りなのかもしれない。

情報の交換はそれなりに良かったとは思うのだが……。やはり集中できるのは最初の一時間ほどだけだな。

「なあ、そろそろ休憩しないか？　なんかスイは寝始めたし、ミユ

は……ノートすら開いてないし」

「私は大体理解できましたので」

「そうだねー。疲れてきたね、というかもうすぐ図書室閉まっちゃう時間だよ」

今学校はテスト期間中なので、生徒たちを解散させようと学校の色々な場所がいつもより早めに戸締りを始めてしまうのだ。もちろん部活は期間中活動停止である。

時計はもうすぐ5時を指そうとしている。

「うーん、なんかもったいないよね。折角部活ないんだからみんなと放課後こんな風に雑談とかしたいよねー」

「美里、これ一応名目は勉強会だから。雑談じゃないから」

「まあ歌音の言いたいことも分かるが……」

「どこか場所を変える？　……そうだ、朝浦くんち行こうよ！　—

人暮らしだったよね？」

ぴきーん、と俺は嫌な予感とともに凍りついてしまった。

「いや、あの、それは、ちょっと、」

「えー、なんでなんで？ あっ、まさか片付いてないとか？ 男の子の一人暮らしだもんねー。大丈夫だよ！ 私が掃除してあげるから！」

「そ、そうだ！ わ、私も手伝うからなっ！」

何故か芹川まで乗ってきた。そしてどうしてそんなにも推してくるのか……。

「いやいや、このノリはよくない。よくないぞ！ ちょっとしたところから俺が同棲（泣）をしていることがバレてしまう。

助けを求める形でミュを見る。彼女はぐっと親指を立てて見せて。

「それはナイスアイディアですね」

「おかしいだろおおおおおがっ！」

俺は咆哮した。

「なっ、どうしたの朝浦君！ そんなに嫌ならいいんだけど……。

そんな叫ぶほど嫌だった？」

歌音が潤んだ瞳で見つめてくる。わけが分からないよ。

ミュは何を考えているんだ……っ。俺を過労死させる気がっ……。

「いや、あの……」

「な、何だっ朝浦陽助！ 何か隠しているのかっ。人を家に入れたくない理由が……はっ！」

「何が『はっ！』なんだ。というかどうにかしてくれ。この中で俺の味方はいない……わけじゃない！」

「スイ、スイ！ 起きろ。勉強会の場所を移そうと思うんだがど

こがいい！？」

「ん……うう？ おうち……」

うわあああああああ！

「え、おうち？ スイちゃんはもう帰っちゃうの？」

「んう？ だって、おうち行くんでしょ？」

「え……………」

「そうかそうか！ 分かった分かった！ 俺の家に行こうとてりあえず黙ろうかスイ！」

駄目だ、これ以上スイを覚醒させてはいけない。そして無表情で笑うなミュウ！

どうしてこうなった。

「おっじゃまつしまーす！」

「お、お邪魔します……………」

「……………」

連れてきてしまった。もうここまできたら隠し通すしかない。ミュウが余計なことをしなければいいが……………。

スイは帰り道の途中で意識が戻り、自分のしたことに顔を青くしていた。どうやらスイは協力してくれるらしい。

まずは確認。何かボロが出るものはないか。よし、玄関にはない。次はリビング。

そろそろ後ろについてくる歌音と芹川。何が珍しいのかきよるきよるとあたりを見回している。

リビング。何か危ないものはあああああつ！？

リビングの、テレビの、前の、カーペットの、上。なんで靴下があるんだよおおお！

二 ソックスって言うのかあれ？ 知らんけどとりあえず回収っ！ シュバババババ、とおそらく超高速で靴下を回収し、制服のズボン

に押し込んでおく。

「あれ？ 朝浦君が……………瞬間移動した？」

冷汗をかきつつ俺はみんなを机へと誘導する。

「みんなは座っててくれ……………。俺は飲み物を持ってくるから」

「朝浦陽助？　なんか疲れれてないか？」

「別にそんなことは……ない」

「あ、アタシ教科書取ってこないと」

今、なんて？

「え？」

「あつ……」

「そうかそうか、スイも手伝ってくれるのか。ありがとう！」

「うええええつ！？」

スイの頭を両手で掴んで台所へと連れて行く。

台所内に入ったところで手を離す。

「わざとやってのをお前……」

「ひいいつ！　怖いよお……そんな怖い顔しないでよお……」

すぐ涙目になるスイ。なんか俺がいじめてるみたいじゃないか……。

いや、実際第三者がこの場を目撃したらそうとしか思えないような状況だが。

「まあ、後から気を付けてくれ。それと、これはお前の靴下か？」

「あ、うん。昨日から脱ぎっぱなしだった」

「ふ・ざ・け・て・ん・の・か……っ！」

「いたいたい。頭掴まないでよお……。アタシは悪魔だぞっ！」

と、そこで後ろから何者かの雰囲気を感じた。

振り向くとそこにはカメラを構えたミュウが。

「何してんだお前は」

「いえ、大変ですね。としまして」

「誰のせいだこの状況は！」

「私は歌音さんに力添えしただけなので」

「それが余計なことなんだよ！」

「そろそろ戻らないと不審に思われますが？」

「……くっ」

ものすごく納得できないが、ミュウの言うとおりだった。

とりあえずはバレなければいい。凌げばいいのだ。簡単なことだ、

こいつらが何もしなければ……。人数分のコップを用意し麦茶を汲んでトレイに載せる。一応全てお客様用のコップだ。こういうところでもボロが出るからな。

「わりい、待たせ……あれ？」

リビングに戻ると、歌音の姿が見当たらなかった。芹川は何故か椅子に座りながらもじもじしている。

「歌音は？」

「えつと……他の部屋に」

「何だとう！？」

ガタン、と俺の部屋の辺りから物音がした。

本日二度目の高速移動。部屋の前に立ち、扉を開け放つ。

「何してんだ歌音！」

「うおえつ！？ えーと、エロ本探し？」

歌音は四つん這いになって俺のベッドの下に手を入れていた。というか、スカートの中が見え……ない。

「いやいや、そんなものねえから！ とりあえず出てくれ」

「うえー、一冊ぐらいあってもいいと思うんだけど」

ブツブツ文句を言いながら部屋を出ていく歌音。何にせよ俺の部屋でよかった。いや、よくはなかったがよかった。

そしてそれから数時間、俺はボロが出ないかどうかヒヤヒヤしながら過ごしていた。

もちろん、勉強の内容なんて頭に入ってこなかった。

「そう言えばさあ」

勉強がひと段落ついたころ、歌音が唐突に言い出した。

「この間朝浦君さ、人探してたじゃん？」

「あ、ああ……」

俺は気を張るのに疲れていて、曖昧な返事しか出来なかった。そういえばなんて言ってたっけ。他のクラスの女子の話だったか。思い出した、あの女の子だ。放課後に見かけた記憶に引っかけた彼女のこと。

「えっと、その隣のクラスの子なんだけどね。結穂ちゃんとは逆の方向のお隣さんなんだけど、だからB組になるんだけど。空宮杏梨そらみやあんりちゃんって言うんだって」

「空宮杏梨か……」

「なにっ!? 朝浦陽助はまた別の女子生徒に手を出そうとしているのか!」

「どうしてそうなるんだ! というか、俺は誰にも手を出してねえよ」

「あれあれ、結穂ちゃん? 何を慌てているのかな」

「美里っ! 変なこと言わないでよね、別に何も無いわよ!」

「朝浦王国民がまた増えるのですか?」

「何それ!? 図書室でも聞いたけど流行ってんのか!?」

そんな突っ込みを入れている中で、俺はその女の子についての記憶をたどっていた。

何か、引つかかるものがあつた気がするのだ。

それが何かは霏がかかったように分からなかったが。

15話・空と太陽、温度は低下（前書き）

ケータイより投稿です！
）
；
（

15話：空と太陽、温度は低下

『名前、名前はなんていうの?』

少年は訊いた。どこか寂しそうにブランコを漕いでいる短髪の子に向かつて。

短髪の子はサンダルを足に引っかけながらぶらぶらと揺らしていた。どこか不満そうな少年を見るその目つきは子供ながらに可愛くはなかった。

公園には二人の子供以外には誰もいなかった。

『ソラ。僕の名前はソラ。』

『そら? ソラっていうんだ。じゃあ、ソラはどこから来たの?』
続けて少年は訊いた。ソラはうーんと唸ってから上を指差した。

穏やかな日差しが差す春のことだった。太陽は優しく二人に微笑んでいるかのようだった。

『空、かな?』

『えっ。ソラは空から来たの? なんか面白いね!』

『面白いの? じゃあ、タイヨウ君はどこから来たの?』

『おうちから……だよ? あっちに僕のおうちがあるんだ。それよ
り、僕の名前はタイヨウ君じゃないよ!』

『タイヨウ君なら、僕と仲良くなれそうだよ。だから、タイヨウ君
』
『どうしてタイヨウだと仲良くなれるの?』

ソラはブランコから飛び降り、空を見上げた。真っ白な雲がふわふわと行き場もなく漂っている。

『だって、タイヨウとソラっていつも一緒に居るよ? しかもすっ
ごく近くに! 絶対仲良しだよ』

『だから僕たちも?』

『そう! ね、遊ぼうよ。一緒に』

『そっだねソラ! 僕たちは仲良くなれるよ、だってもう友達だも
ん!』

『あはははっ』

そう笑うソラの笑顔は輝いていた。それはタイヨウにも勝るくらいの輝かしさで。

ただ、天気の良い日なんてものは永遠ではない。

雨が降る日もあれば、雪の降る日だってある。台風だってくることもある。

二人は、一緒に居られなかった。

見上げる分には空と太陽は近い。同じ場所にある。でも。

本当は空なんてものは存在なんてしてなくて、太陽は地球の外にある恒星で。

二人の距離はあまりに遠く、遠く。

夜になれば、二人ともいなくなってしまうのに。

星が落下した。

いや、正直に言おう。星が舞った。

頭を何にぶつけたのかとか、またミュの仕業だとかそんなことではなかった。

ベットから落ちて床に頭を打ちつけていた。

「いつつ………。おいおい、ガキじゃないんだから……」

頭を振りながら立ちあがる。床は冷たくて気持ちが悪かったが、今は涼んでいる気分ではなかった。

何か変な夢を見た気がする。二人の少年の夢？ 内容がよく思い出せない。まるで霧がかかったかのようにもやもやと見事に何も思い出せない。

感覚で言えば、喉まで出かかっているという奴だ。まあ、喉止まりで出てくる様子は一向にないのだが。

携帯で時間を確認すると、6時だった。そう言えばミュとスイが来てから最初の方はこの時間帯に起こされたが、今は30分引き伸ばされて6時半にミュが攻撃という名の手段を用いて俺を起こしに来る。

ガチャ、と俺の部屋のドアが開かれる。隙間から覗いているのはミュだ。

「どうしたんだ、いつもより早いじゃないか」

「何か物音がしたので……。いえ、罨を張ろうかと思いましたが」

「……。ただベットから落ちただけだよ。何もなかった」

「そうですか。では、私が起きてしまったので朝食の準備をお願いします。夢落ちさん」

「へいへい……」

珍しくパジャマ姿だったミュの後を追って、リビングに向かう。

ミュが部屋のカーテンを開き、俺は朝食の準備に取り掛かる。おそらくスイは後1時間半ほど起きてこないだろう。

「そう言えばお前、パジャマのままだぞ」

「……………変態ですね」

「意味が分からんぞ！俺はただ、その、指摘しただけであつてだな！」

「あまりじろじろ見ないください。恥ずかしいです」

「だから、その棒読みを何とかしろよ……。可愛げもあったもんじゃないぞ」

「むっ、そうですか。では着替えてきます」

そういうとミュはリビングから出ていった。これもまた珍しく物聞きのよいミュだった。

それより何だろうか。今日はとても大切なことがあった気がする。行事、行事だ。……そうか、テストか。

今日は1日午後までテストづくしだったはずだ。それでもって明日も1日使ってテストだ。

これは気が滅入る。朝から嫌なことを思い出してしまった。

しかし、俺は去年とは違って勉強会なるものをして情報交換を行ったし、ちょこつとだけ勉強もした。歌音には勝てないだろうが、よいところまで行けるのではないかと思う。

ちなみにうちの学校、滝原高等学校はテストランキングなるものが張り出される。成績上位者30名の名前が並べられるのだ。二年生はD組まであって大体200名程度。俺はその中間からちょっと下をうろろろしていた。各個人には大体位置するであろう順位と成績がプリントで配布される。

一年生の時点で最高順位は98/200位。本当に微妙である。

「ゴミムシさん。パンが焦っていますよ」

いつの間にかそばに居たミュがオーブントースターの中を指差す。

そこには真っ黒とまではいかないが、こげ茶に染まった食パンが鎮座していた。

「うあ……やっちまった。悪い、焼き直すから待っていてくれ」

「いえ、私はそれで構いません。そのかわりちーずをのせておいてください」

「あ、ああ……」

罵詈雑言、が飛んでこなかった。いつもであれば『お前も焦げるか？』といったようなニュアンスを醸し出すユニークな暴言が飛んでくるはずなのだが。

「な、なあ。どうしたんだお前」

「どうした、とは？」

「何かいつも違う気がして、なんだが」

「今日はテストですね」

「……そうだが？」

ミュは新聞を広げ、政治経済の欄を横眼で眺めつつ

「陽助様はどのような失態を繰り広げるのか、と楽しみで」

「お前……何を言っている？」

「知能の差、というものを見せつけるにはもってこいの行事ですの

で、朝から興奮してまして……。すいません陽助様」

「なにあやまつてんの!? え、これ、俺はどう怒ればいいわけ!?」

それきりミュは朝食を催促するように俺をじっと見つめたまま何も言わなくなった。

ぐっ、と睨み返しているが、その大きな瞳に弾かれてしまう。なんだかこつちが恥ずかしくなってきた。

「何故に頬を赤らめているのですか気持ちが悪い」

「う、うるせっ」

決してミュに見惚れていたわけではない。そう、断じて違う。

セットしていない柔らかな髪に大きな瞳、柔らかそうな唇。素のミュは可愛いなあとか思ったりはしない。そう、しない。

「今すぐく強烈な悪寒が走りました。全身に鳥肌が立って気が狂いそうでした」

「……………」

本当にこいつは心が読めるんじゃないかと考えるときがある。

「おっはよー、朝浦君！ テストだよ。辛いよね苦しいよね厳しいよねー！」

くるくるくると朝から元気な歌音は教室に入るなりそんな事を叫んだ。

もちろん後ろにはミュと寝ぼけたスイを連れて。

教室の他の連中は仲間同士で集まって最終確認をしたり、問題を出し合ったりしていた。

そんな中で俺たちは何故か雑談である。

「もー、ほんとにテストってやだよ。なんか、心臓がキューっとなるよね」

「歌音は別にいつも高得点だろ」

「それはそうだけど、気分がよくないよね！」

否定はしないところが歌音らしいといつかなのか。

スイは数学の本を逆さに持って目を白黒させている。雑談などしている場合ではないくらいにヤバいらしい。

「おい、スイ。それ逆さ」

「し、知ってる。何か新たな記憶方法が無いか模索してるところなの！」

「スイ。キャラは？」

「今はちよつとタイム！」

タイムとかあるのか。便利だな、こいつのキャラづくり。

そんなこんなで朝の猶予は無くなり、ホームルームが終わってテストが始まった。

まあ、俺も雑談してる場合じゃなかったな。

昼休み。

答え合わせを行う連中は放っておいて、俺たちはまたも雑談に興じていた。

朝とは違って芹川も加わって、さらにやかましく。

スイはなんとというか、ある意味完全燃焼な感じだった。

「あ、朝浦陽助はどうだったんだ？」

あえて答え合わせはせずに、出来はどうだったかと聞き合っこの連中だ。

「俺？ ……正直いつもどおりっちゃあいつも通りだが」

「いつも通りがたかが知れてますね」

「だあまっつれ！ んで、芹川は？」

「わ、私の（出来の）ことがきになるのか？」

「うん？」

「ふうん、まあ上々かな。今度こそ1桁台に入ってやる」

芹川は頭がよかった。いつもは10何番台で2桁止まりだったらしい、なので目標は1桁台らしい。

ていうか、俺ならそこまで行けばもう充分なんだけどな。

やっぱり向上心的なものがある人は何かが違うのだろう。

「芹川はすげえなー」

「そ、そうだろう。そうだろう！」

「わ、私は点数が1桁台かもしれないよう……………」

ある一名の泣き声でここら一体の温度が低下した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8550v/>

天使と悪魔の共同戦線

2011年10月12日11時56分発行